

# 電子商取引等に関する準則

平成14年3月

経済産業省

## はじめに

法令は、それが制定・改正された当時における技術を前提としている。このため、新たな技術の登場は、法令の規律が前提としていた紛争実態などの事実に変化をもたらす。この結果、技術の進歩に応じた柔軟な法令解釈が求められるとともに、こうした解釈では対応できない事項については新たな法令の構築が求められることとなる。

インターネットの登場は、電子商取引をはじめとした新たな経済行為を産み出している。ところが、民法を始めとする現行法の大半はこうした新たな技術を前提とせずに制定されているため、電子商取引について、現行法がどのように適用されるのかその解釈が明確であるとは必ずしも言い難く、当事者が安心して電子商取引に参加できる法的な環境にあるとは言えない。本来であるならば、現行法の解釈に関して不明確な事項があれば、判例の積み重ねによって合理的なルールが自ずと明らかになるのであるが、我が国の司法制度のあり方については、新しい時代の要請に即した司法制度改革の議論が始まったばかりであり、当面、こうした司法による判例の積み重ねが迅速に進むことにのみ期待することは難しい。

この準則は、電子商取引等に関する様々な法的問題点について、民法をはじめとする関係する法律がどのように適用されるのか、その解釈を示し、取引当事者の予見可能性を高め、取引の円滑化に資することを目的とするものである。もとより、個別具体的な事例において現行法がどのように適用されるのかを最終的に判断するのは裁判所であることは言うまでもないが、この準則が一つの法解釈の叩き台となることにより、新しいルール形成の一助になることを願っている。

また、この準則は、電子商取引をめぐる様々な論点について、消費者団体、事業者団体や、内閣府・法務省・公正取引委員会・文化庁など関係府省からのオブザーバーの方々のご助言を頂きながら、産業構造審議会情報経済分科会

ルール整備小委員会（委員長：中山信弘東京大学教授）において取りまとめいただいた提言を踏まえ、経済産業省が現行法の解釈についての一つの考え方を提示するものであり、今後電子商取引をめぐる法解釈の指針として機能することを期待する。

さらに、この準則は、電子商取引をめぐる取引の実務、それに関する技術の動向、国際的なルールメイクの状況に応じて、柔軟に改正されるべき性格のものと考えている。また、基本的な考え方を示すとともに、具体的事例における考え方も示したいと考えている。そのために、実際に電子商取引に関わっている事業者や消費者から、具体的な事例について、考え方を広く募りたい。この準則の中でいくつか具体例を挙げているが、これ以外にもさらに適当なものがあれば、ぜひ下記へご提案頂きたい。

< 電子商取引等に関する準則についての連絡先 >

経済産業省商務情報政策局情報経済課

FAX 03-3501-6639

E-Mail qqibbd@meti.go.jp

# 電子商取引等に関する準則

## - 目次 -

第1．オンライン取引	1
1．契約手法に関する問題	2
(1) 契約の成立時期（電子承諾通知の到達）	2
(2) なりすましによる意思表示の当事者でない者への効果帰属	5
(3) なりすましを生じた場合の認証機関の責任	14
(4) 未成年者による意思表示	17
(5) 管轄合意条項の有効性	19
2．新たな取引の発展に伴う問題	20
電子商店街（サイバーモール）運営者の責任	20
3．消費者保護	23
(1) 消費者の操作ミスによる錯誤	23
(2) インターネット通販における分かりやすい申込画面の設定義務	27
(3) ウェブ上の広告表示の適正化	33
ア) 景品表示法による規制	33
イ) 特定商取引法による規制	35
第2．情報財取引	38
1．ライセンス契約	38
(1) 契約の成立とユーザーの返品可否	39
ア) 情報財が媒体を介して提供される場合	39
イ) 情報財がオンラインで提供される場合	48
(2) 重要事項不提供の効果	52
(3) 契約中の不当条項	56
(4) 契約終了時におけるユーザーが負う義務の内容	59
(5) 契約終了の担保措置の効力	63

(6) ベンダーが負うプログラムの担保責任	67
(7) ユーザーの知的財産権譲受人への対抗	75
2 . 知的財産	80
(1) PtoP ファイル交換ソフト	80
(2) ドメイン名の不正取得等	83

## 第 1 . オンライン取引

ここでは、電子商取引等が、オンライン環境にあるインターネットその他のコンピュータ・ネットワークを利用して行われるという新たな経済行為であることに伴い生じる諸問題について、検討する。

## 1. 契約手法に関する問題

### (1) 契約の成立時期（電子承諾通知の到達）

#### 【論点】

電子契約の成立時期である承諾通知が到達した時点（電子契約法第4条）とは、具体的にいつか。

#### 【考え方】

電子メールの場合、<I>承諾通知の受信者（申込者）が指定したまたは通常使用するメールサーバー中のメールボックスに<II>読み取り可能な状態で記録された時点である。

#### <I> 承諾通知の受信者（申込者）のメールサーバー中のメールボックスに記録された場合

（該当する例（契約成立））

- ・ 承諾通知が一旦メールボックスに記録された後にシステム障害等により消失した場合
- ・
- ・

（該当しない例（契約不成立））

- ・ 申込者のメールサーバーが故障していたために承諾の通知が記録されなかった場合
- ・
- ・

#### <II> 読み取り可能な状態で記録された場合

（該当しない例（契約不成立））

- ・ 送信された承諾通知が文字化けにより解読できなかった場合
- ・ 添付ファイルによって通知がなされた場合に申込者が復号して見読できない場合（申込者が有していないアプリケーションソフトによって作成されたため、復号して見読できない場合など）
- ・

#### 【説明】

### 1. 電子契約の成立時期（承諾通知の到達）

電子メール等の電子的な方式による契約の承諾通知は原則として極めて短時間で相手に到達するため、隔地者間の契約において承諾通知が電子メール等の電子的方式で行われる場合には、民法第526条第1項及び第527条が適用されず、当該契約は、承諾通知が到達したときに成立する（電子消費者契約及び電子承諾通知に関する民法の特例に

関する法律（以下「電子契約法」という。）第4条、民法第97条第1項）。

## 2. 「到達」の意義

この到達の時期について民法には明文の規定はないが、意思表示の到達とは、相手方が意思表示を了知し得べき客観的状态を生じたことを意味すると解されている（最高裁昭和43年12月17日第三小法廷判決・民集22巻13号2998頁）。電子承諾通知の到達時期については、相手方が通知に係る情報を記録した電磁的記録にアクセス可能となった時点をもって到達したものと解される。例えば、電子メールにより通知が送信された場合は、通知に係る情報が受信者（申込者）の使用に係る又は使用したメールサーバー中のメールボックスに読み取り可能な状態で記録された時点であると解される。具体的には、次のとおり整理されると考えられる。

ア）相手方が通知を受領するために使用する情報通信機器をメールアドレス等により指定していた場合や、指定してはいないがその種類の取引に関する通知の受領先として相手方が通常使用していると信じることが合理的である情報通信機器が存在する場合には、承諾通知がその情報通信機器に記録されたとき、イ）ア）以外の場合には、あて先とした情報通信機器に記録されただけでは足りず、相手方がその情報通信機器から情報を引き出して（内容を了知する必要はない。）はじめて到達の効果が生じるものと解される。

なお、仮に申込者のメールサーバーが故障していたために承諾通知が記録されなかった場合は、申込者がアクセスし得ない以上、通知は到達しなかったものと解するほかない。

他方、承諾通知が一旦記録された後に何らかの事情で消失した場合、記録された時点で通知は到達しているものと解される。

## 3. 「読み取り可能な状態」の意義

送信された承諾通知が文字化けにより解読できなかった場合（なお、解読できないか否かについては、単に文字化けがあることのみではなく、個別の事例に応じて総合的に判断されることとなる。たとえば、文字コードの選択の設定を行えば復号が可能であるにもかかわらず、それを行わなかったために情報を復号することができない場合のように当該取引で合理的に期待されている相手方のリテラシーが低いため、情報の復号がで



きない場合には、表意者（承諾者）に責任がなく、この要件は、相手方が通常期待されるリテラシーを有していることを前提として解釈されるべきであると考え。）や申込者が有していないアプリケーションソフト（たとえば、ワープロソフトの最新バージョン等）によって作成されたファイルによって通知がなされたために復号して見読することができない場合には、申込者の責任において、その情報を見読するためのアプリケーションを入手しなければならないとすることは相当ではなく、原則として、申込者が復号して見読可能である方式により情報を送信する責任は承諾者にあるものと考えられる。したがって、申込者が復号して見読することが不可能な場合には、原則として承諾通知は不到達と解される。

## (2) なりすましによる意思表示のなりすまされた本人への効果帰属

### 【論点】

いわゆる「なりすまし」が行われた場合、なりすまされた本人が責任を負う場合があるか。

### 【考え方】

#### <1> インターネット通販における決済をめぐる問題

インターネット通販において、なりすましが問題となるのは、主に決済の場面である。特に、クレジットカード決済やインターネットバンキング決済のように、消費者側から見て、商品購入と代金決済とで相手方が異なる場合、複数の当事者間における法律関係がどのようなになるかという複雑な問題が生じる。

これらの場合、i)なりすまされた本人と販売店（売主）との間の法律関係、すなわち、なりすまされた本人と売主との間の契約が成立しているかどうかと、ii)なりすまされた本人と決済機関（カード会社・銀行）との間の法律関係、すなわち、決済機関はなりすまされた本人に代金の支払い請求をすることができるか（またはなりすました者の指示に従ってなされた振込は有効か）がそれぞれ問題となる。

#### i) 本人と売主との間の売買契約は成立するか

##### ア) 本人確認の方式について事前合意がない場合（1回限りの取引）

本人確認の方式について事前合意がない場合、なりすましによる意思表示については、原則として本人に効果は帰属しないので、本人と売主との間で契約は成立しない。

しかし、a)外観の存在、b)相手方の善意無過失、c)本人の帰責事由という民法上の要件を満たせば、表見代理の規定（民法第109条、第110条、第112条）を類推適用して、本人に効果帰属が認められ、契約が成立する場合がある。

(本人に効果帰属が認められる可能性がある例) ・ ・ ・
(本人に効果帰属が認められないと思われる例) ・ ・ ・

## イ) 本人確認の方式について事前合意がある場合 (継続的取引)

継続的取引の場合、通常、特定の ID やパスワードを使用することにより本人確認を行うこととするなど、本人確認の方式について事前に合意がなされている。この場合、事前に合意された方式を利用していれば、原則として本人に効果が帰属し、本人との間で契約は成立する。

しかし、売主側が提供するシステムのセキュリティの安全性の程度について相手方が認識しないまま事前合意がなされた場合において、当該相手方が通常合理的に期待する安全性よりもセキュリティレベルが相当程度低いときは、事前合意の効力が制限される可能性がある。そのほか、一方当事者が消費者の場合において、消費者側の帰責事由の有無を問わず一律に本人に責任を負わず場合なども、合意の効力が認められない場合がある。その場合は、上記ア) に従って判断される。

(事前合意が無効となる可能性がある例) ・ ID・パスワードにより事業者が本人確認をしさえすれば、消費者(本人)の帰責性の有無に関わらず、一律に本人に効果が帰属するとする条項 ・ 具体的なセキュリティシステムについての合意のないまま本人確認の方式のみについて事前合意がなされたものの、売主側の設定したセキュリティシステムの安全性が低く、本人確認のための情報について漏洩のおそれが高い場合 ・
(事前合意が有効となる可能性がある例) ・ データは SSL で暗号化して送信するとともに、売主側のシステムの安全性が高く、データの漏洩のおそれが著しく低い場合 ・ ・

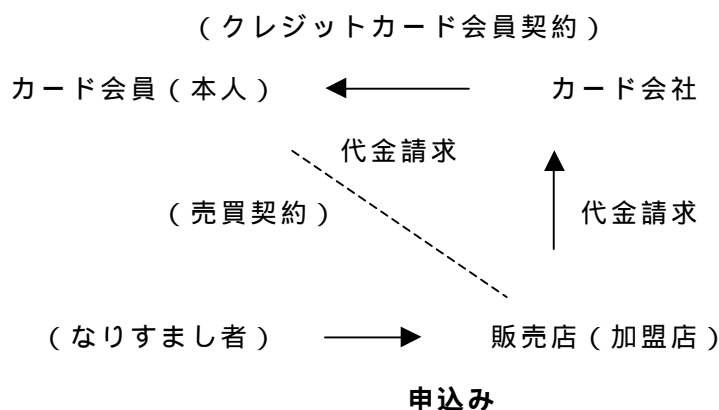
## ii) 本人と決済機関との関係

### ア) クレジットカード決済の場合

インターネット通販におけるクレジットカードを用いた決済の場合、クレジットカード番号及び有効期限などを入力することによって行われることが多い。このような形態でなりすましが行われた場合、なりすまされた本人(カード会員)に支払義務が生じるか。

現行クレジットカード会員規約からすると、カード会社は、表見代理となる場合またはクレジットカード会員規約上の義務違反により本人に帰責事由がある場合などを除き、支払または賠償義務を負わないこととなっている。

現行実務上の規約及び取扱いからすると、次のようになる。



#### a) なりすまされた本人に責任がある場合

なりすまされた本人に支払または賠償義務がある。

しかし、なりすまされた本人に故意または重大な過失がある場合やカード会員の関係者がカードを使用した場合などなりすまされた本人の責任が大きい場合を除いて、カード会社の負担またはカード会員契約に含まれている保険などにより、本人の支払うべき金額を補填している。また、第三者による不正使用のケースについては、カード会社が事実関係の調査を行った上、なりすまされた本人に対して、そもそも支払請求を行わない場合もある。

- (なりすまされた本人に責任がある場合)
- ・ 家族や同居人がクレジットカードを使用した場合
  - ・ 他人にクレジットカードを貸与し、そのカードが使用された場合
  - ・ クレジットカード以外に決済用に付与され、本人しか知り得ないID・パスワードなどが使用された場合

#### b) なりすまされた本人に責任がない場合

なりすまされた本人に支払義務はない。

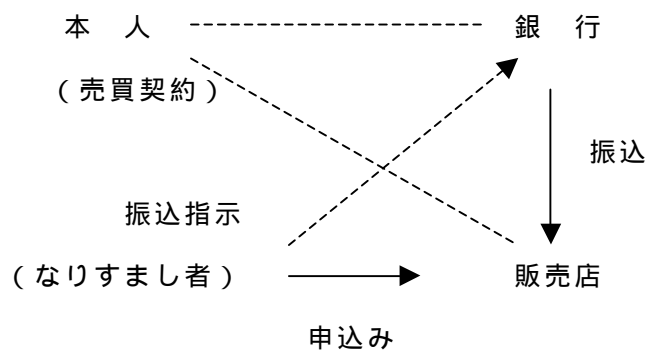
- (なりすまされた本人に責任がない場合)
- ・ クレジットカード番号及び有効期限が使用された場合であっても、クレジットカードおよびクレジットカード番号などを適切に管理・保管していたとき

- ・加盟店からカード決済に必要な情報が漏洩し、使用された場合
- ・

## イ) インターネットバンキング決済の場合

代金決済に銀行のインターネットバンキング・サービスを利用する場合、第三者は、銀行に対して、改めて本人になりすまし、振込指示を行うことになる。

ところで、銀行実務においては、通常、約款で本人確認の方式について事前合意を結び、事前に合意された方式を利用していれば、なりすました者の指示に従った資金移動も有効とすることとしている。このような約款の効力は、銀行のセキュリティシステムの安全性の程度も考慮して判断される。現時点の技術を前提とすると、具体的には以下のように考えられる。



(免責約款が有効とされる場合)

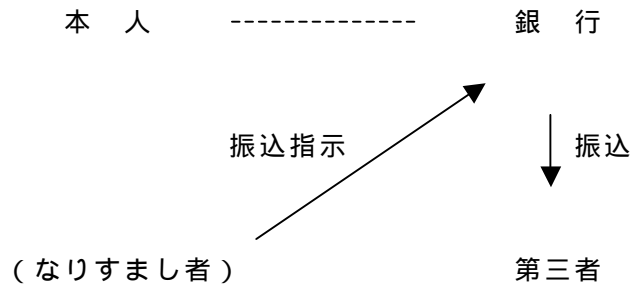
- ・本人確認の方法として複数のパスワードを使うとともに、データは SSL で暗号化して送信する場合
- ・
- ・

(免責約款が無効とされる場合)

- ・
- ・
- ・

## <II> インターネットバンキングにおける資金移動の問題

第三者が他人になりすましてインターネットバンクにおいて振込の指示をした場合、なりすまされた本人の口座からの資金移動は有効かという問題がある。



銀行実務においては、通常、約款で本人確認の方式について事前合意を結び、事前に合意された方式を利用していれば、なりすました者の指示に従った資金移動も有効とすることとしている。このような約款の効力は、銀行のセキュリティシステムの安全性の程度も考慮して判断される。現時点の技術を前提とすると、具体的には以下のように考えられる。

<p>(約款が有効とされる場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本人確認の方法として複数のパスワードを使うとともに、データは SSL で暗号化して送信する場合</li> <li>・</li> <li>・</li> </ul>
--

<p>(約款が無効とされる場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・</li> <li>・</li> <li>・</li> </ul>
--

## 【説明】

### 1．問題の所在

非対面の取引である電子商取引においては、無権限者が他人の名義を冒用して取引を行うことが容易である。今後、当事者の同一性の確認の方法を提供する電子署名・認証制度等の環境整備の進展によって、このようないわゆる「なりすまし」の危険が減少していくことが考えられるが、仮に「なりすまし」が行われた場合、当事者でない名義を冒用された者が責任を負う場合はあるのか。

電子商取引において「なりすまし」が問題となることが多いと思われるインターネット通販における問題（特に決済をめぐる問題）とインターネットバンキングにおける問題について検討する。

### 2．インターネット通販における問題

インターネット通販において、なりすましが問題となるのは、主に決済の場面である。

特に、クレジットカード決済やインターネットバンキング決済のように、消費者側から見て、商品購入と代金決済とで相手方が異なる場合、複数の当事者間における法律関係がどのようになるかという複雑な問題が生じる。

これらの場合、(1)名義を冒用された者(なりすまされた本人)と販売店(売主)との間の法律関係、すなわち、名義を冒用された者と売主との間の契約が成立しているかどうかと(2)名義を冒用された者と決済機関(カード会社・銀行)との間の法律関係、すなわち、決済機関は名義を冒用された者に代金の支払を請求することができるか(又は無権限者の指示に従ってなされた振込は有効か)がそれぞれ問題となる。

#### (1) 名義を冒用された者と販売店(売主)との間の法律関係

##### ア) 原則(事前合意がない場合)

本人以外の第三者がした意思表示については、当該第三者に代理権がある場合を除き、原則として本人に効果は帰属しない。しかし、民法は表見代理の規定(第109条、第110条、第112条)により一定の要件の下、本人に効果帰属を認めている。これらについては、i)代理権があるかの如き外観の存在、ii)相手方の代理権の不存在についての善意無過失、iii)本人の帰責事由を要件とし、特にii)とiii)の要件によって無権代理人の代理権を信じた者と本人との利害を調整し、妥当な解決を図ることが可能となっている。なお、表見代理制度は、取引の相手方が当該第三者に代理権があると誤認した場合の規定であり、なりすましの場合に直接適用されるものではないが、判例は、代理人が直接本人の名で権限外の行為を行い、その相手方がその行為を本人自身の行為と信じた場合について基本代理権の存在を認定した上で、民法第110条の規定の類推適用を認めている(最高裁昭和44年12月19日第二小法廷判決・民集23巻12号2539頁)。

電子商取引においても、これと同様に本人による基本代理権の授与やこれに相当する本人の帰責性が認められる事案については、表見代理の規定を類推適用することにより、なりすまされた本人に効果帰属を認めることが可能である。

##### イ) 事前合意がある場合

ところで、継続的な契約関係がある当事者間においては、本人確認の方式等無権限者による意思表示の効果帰属について特約(基本契約)を予め締結する場合がある。すなわち、特定のIDやパスワードを使用することにより本人確認を行うこととし、当該方

式に従って本人確認を行っていれば、仮に無権限者による意思表示であっても本人に効果を帰属させることとする場合がある。このような合意の効力をいかなる場合にも認めることについては、次のような問題がある。

契約自由の原則の下、事業者間取引のように、対等な当事者間において本人確認の方式について合意した場合には、原則としてその効力が認められるものと解される。

しかし、売主側が提供するシステムのセキュリティの安全性の程度について相手方が認識しないまま事前合意がなされた場合において、当該相手方が通常合理的に期待する安全性よりもセキュリティレベルが相当程度低いときは、事前合意の効力が制限される可能性がある。例えば、通常合理的に期待できる安全性を有したセキュリティシステムを前提とした上で事前合意がなされたものと認められるような場合であれば、そのような安全性を有していないセキュリティシステムの下で行われた無権限者による取引について、売主側が事前合意によって本人に効果帰属を主張する（履行を求める）ことができることにはならないであろう。なお、ここでいうセキュリティの内容としては、ファイアウォールの設置、データ送信の暗号化など狭義のシステム上の問題にとどまらず、顧客情報の管理等のあり方等も含まれる。

また、一方当事者が消費者の場合には、選択された方式の合理性・安全性について十分な判断ができないおそれがあること、方式について事業者が一方的に指定し、消費者の側に選択の自由がないのが通常であると考えられることから、消費者側の帰責事由の有無を問わず一律に消費者本人に対する効果帰属を認めるような事前合意は、消費者契約法第 10 条や民法第 90 条により無効となる可能性がある。

## (2)名義を冒用された者と決済機関との間の法律関係

### ア) クレジットカード決済の場合

名義を冒用された者（カード会員）と売主（カード加盟店）との間の売買契約とカード会員とカード会社との間の立替払契約とは別個の契約であるため、カード会員とカード会社との決済については、売買契約の成否とは別に検討する必要がある。

ところで、インターネット通販におけるクレジットカードを用いた決済の場合、現在のところ、クレジットカード番号及び有効期限などを入力することによって行われるのが通常であるが、このような形態でなりすましが行われた場合、カード会員とカード会社との間で締結されている会員規約上、カード会員に支払義務が生ずるか否か問題とな



る。

現行のクレジットカード会員規約からすると、カード会員は、表見代理となる場合又はクレジットカード会員規約上の義務違反により本人に帰責事由がある場合などを除き、支払又は賠償義務を負わないこととなっている。

また、現行実務におけるクレジットカード会員規約は、概ね次のような内容となっている。

カード会員はクレジットカード及び暗証番号を善良なる管理者としての注意をもって管理・保管する義務を負う。この善管注意義務に反した結果、クレジットカードが不正使用された場合、カード会員は支払義務を負う。また、クレジットカードの紛失・盗難により不正使用された場合もカード会員は支払義務を負う。カード会員が支払義務を負う場合であっても、カード会員に故意又は重過失があるときや家族その他カード会員の関係者が使用したとき等を除き、カード会社の負担又はカード会員契約に含まれている保険などにより、本人の支払うべき金額を補填している。

以上をまとめると、カード会員に善管注意義務違反がない場合など、すなわち、帰責事由がない場合、カード会員には支払義務はない。他方、カード会員に善管注意義務違反がある場合など、すなわち、帰責事由がある場合、カード会員に支払義務がある。しかし、カード会員に故意又は重過失がある場合等カード会員の帰責事由が大きい場合を除き、カード会員が実質的に負担を負うことはないようになっている。また、現行実務においては、インターネット取引のようなサインレス取引の場合、なりすましのようになりすましの第三者によってカード情報が不正に使用されたケースについては、カード会社が事実関係の調査を行った上、カード会員に対して、支払請求を行わない扱いをする場合もある。

#### イ) インターネットバンキング決済の場合

代金決済に銀行のインターネットバンキング・サービスを利用する場合、第三者は、銀行に対して、改めて本人になりすまし、振込指示を行うことになる。

ところで、銀行実務においては、通常、約款で本人確認の方式について事前に合意し、その合意した方式が利用されたのであれば、なりすました者の指示に従った資金移動について、銀行は責任を負わないこととしている。

このような無権限者に対する弁済に関する当事者間の約款の効力について参考となる

判例として最高裁平成 5 年 7 月 19 日第二小法廷判決（判例時報 1489 号 111 頁）がある。この判決は、「銀行の設置した現金自動支払機を利用して預金者以外の者が預金の払戻しを受けたとしても、銀行が預金者に交付していた真正なキャッシュカードが使用され、正しい暗証番号が入力されていた場合には、銀行による暗証番号の管理が不十分であったなど特段の事情がない限り、銀行は、現金自動支払機によりキャッシュカードと暗証番号を確認して預金の払戻しをした場合には責任を負わない旨の免責約款により免責されるものと解するのが相当である。」として、約款の効力を認めた。この判決で注目すべき点は、約款の文言だけではなく事件が発生したときに銀行が採用していた支払システムの安全性を問題としている点である。

今後同種の事案が発生した場合、その時点におけるセキュリティシステムの安全性の程度も考慮されて約款の効力が判断されることになるものと考えられる。

現時点の技術を前提とすると、本人確認の方法として複数のパスワードを使うとともに、データは SSL で暗号化して送信するような場合は、約款が有効と認められる可能性が高いと考えられる。

### 3．インターネットバンキングにおける問題

第三者が他人になりすましてインターネットバンキングにおいて振込の指示をし、それに基づいて銀行が振込を実行した場合、名義を冒用された者の口座からの資金移動は有効かという問題である。

#### (1)事前合意がない場合

権限のない者への弁済については、民法第 478 条が適用され、i)債権者らしい外観及び ii)弁済する者の弁済を受領した者が債権者でないことについての善意無過失があれば、当該弁済は有効とされるが、この理は電子資金移動の場合も同様である。

#### (2)事前合意がある場合

前記 2 . (2)イ) のとおり、銀行実務においては、通常、約款で本人確認の方式について事前に合意し、合意した方式が利用されたのであれば、なりすました者の指示に従った資金移動について、銀行は責任を負わないこととしている。この約款の効力についての考え方は既に示したとおりである。

### (3) なりすましを生じた場合の認証機関の責任

#### 【論点】

電子署名の認証機関による本人確認が不十分なため、なりすましが生じた場合、認証機関は証明書を信頼して損害を受けた者に対してどのような責任を負うか。

(例) 本人確認が不十分なまま、電子署名の認証機関が名義人(本人)になりすました第三者に電子証明書を発行した。証明書を受け取った取引の相手方が第三者を本人と信じたものの、本人との間で取引の効果が認められない結果、損害を受けた場合、認証機関はどのような責任を負うか。

#### 【考え方】

##### <1> 本人確認が不十分な場合

###### i) 原則：不法行為責任

電子署名の認証機関が十分な本人確認をせずに電子証明書を発行し、その後それが利用され、証明書を受け取った相手方がこれを信じたものの、なりすまされた本人(電子署名の名義人)への効果帰属が認められなかったために損害を受けた場合に、認証機関は証明書の受取人に対し、不法行為責任を負う。この場合、受取人側が認証機関の過失(本人確認が不十分であること)について立証責任を負う。

###### ii) 例外：契約責任

認証機関と受取人との間に通常は契約関係がないので、認証機関は原則として契約上の責任を負うことはない。

しかし、例えば第三者が証明書を受け取る場合に、認証機関から認証業務規程(CPS)が示され、受取人がCPSを承認する旨応答する場合などの中には、契約関係の成立を認めることができる場合もあり得る。契約関係が認められた場合、認証機関はCPSを遵守する義務があり、CPSで定め

た本人確認手続に違反したときは、債務不履行責任を負う。この場合、認証機関側が自己の無過失について立証責任を負う。

( 契約関係の成立が認められる例 ) ・ ・ ・
( 契約関係の成立が認められない例 ) ・ ・ ・

## <II> 認証機関が定める免責約款の効力

認証機関が CPS で賠償責任額の制限（免責約款）を定めている場合があるが、その効力が問題となる。

### i) 受取人と認証機関との間に契約関係の成立が認められない場合

関係当事者は、約款には何ら拘束されない。

### ii) 受取人と認証機関との間に契約関係の成立が認められる場合

原則として約款に従うことになる。

しかし、認証機関の免責条項については、例えば消費者契約においては、債務不履行や債務の履行に際してなされた不法行為による損害賠償について、全部を免責する条項や一部を免責する条項（認証機関の故意又は重過失による場合に限る。）は無効とされると考えられる（消費者契約法第 8 条）ほか、個別の事情を考慮して、その有効性が問題とされる場合があるものと解される。

( 免責条項が有効となる例 ) ・ ・ ・
( 免責約款が無効となる例 ) ・ ・ ・

## 【説明】

### 1 . 不法行為責任

電子署名の認証機関が十分な本人確認をせずに電子証明書を発行し、その後それが利

用され、相手方がこれを信じたものの、当該電子署名の名義人への効果帰属が認められなかったために損害を受けた場合に、認証機関は当該証明書を信じた者に対し、原則として不法行為責任を負う。

反対に、電子署名の名義人への効果帰属が認められた場合には、認証機関は、そのことにより損害を受けた当該名義人に対し、原則として不法行為責任を負う。

なお、不法行為責任の場合、損害賠償を請求する側が認証機関の過失についての立証責任を負う。

## 2．契約責任

認証機関と電子証明書を信じた者又は名義人との間に通常は契約関係はないので、原則として契約上の責任を負うことはないものと考えられる。しかしながら、認証機関は、ホームページにおいて認証業務の内容につき約款に相当する認証業務規程（CPS）を公表しているが、例えば第三者が証明書を受け取る場合に、認証機関から CPS が示され、第三者が当該 CPS を承認する旨応答する場合などの中には、認証機関と電子証明書を信じた者との間に契約関係の成立を認めることができる場合もあり得るのではないかとの議論がある。仮に契約関係の成立を認めることができるならば、認証機関が CPS に違反している場合など、債務不履行責任を負う場合もあると解される。

この場合、認証機関の側が自己の無過失についての立証責任を負う。

## 3．免責条項の有効性

電子商取引における損害額は高額に及ぶ可能性があることから、認証機関の示す約款等に認証機関の免責条項を設けることが見受けられる。この点については、前記のとおり、そもそも電子証明書を受け取る者と認証機関との間で、契約関係（免責に関する合意）が成立しているか否かが問題となるが、仮にこれが認められる場合であっても、消費者契約においては、債務不履行や債務の履行に際してなされた不法行為による損害賠償について、全部を免責する条項や一部を免責する条項（認証機関の故意又は重過失による場合に限る。）は無効とされることが考えられる（消費者契約法第 8 条）ほか、個別の事情を考慮して、その有効性が問題とされる場合があるものと解される。

#### (4) 未成年者による意思表示

##### 【論点】

電子契約の一方当事者が未成年の場合、その未成年者は原則として意思表示を取り消して契約の効力を否定することができる（民法第4条）が、年齢確認画面への対応によっては、民法第20条の「詐術」の適用により、取り消すことができない場合があるのではないかと。

（例）未成年者がインターネット通販において、自分が成年であるかのように虚偽の生年月日を入力した上、商品を購入した場合であっても、契約を取り消して代金支払を拒否できるか。

##### 【考え方】

事業者が電子商取引の際に画面上で年齢確認のための措置をとっているときに、未成年者が故意に虚偽の年齢を通知し、その結果、事業者が相手方を成年者と誤って判断した場合、民法第20条により、当該未成年者は取消権を失う可能性がある。

（取り消すことができない可能性のある例）

- ・ 「未成年者の場合は親権者の同意が必要である」旨警告した上で、年齢確認措置をとっている場合

・

（取り消すことができると思われる例）

- ・ 単に「成年ですか」との問いに「はい」のボタンをクリックさせる場合

・

##### 【説明】

###### 1. 原則

未成年者が法定代理人の同意を得ないで行った意思表示は取り消しうるものとされている（民法第4条）。

対面取引においては、容ぼう等の外観、身分証明書の提示等により、相手方が未成年者か否かを比較的容易に判断することができる。他方、電子商取引においては、非対面の取引が容易に行えるという意味で、未成年者が取引をする場合が従来の取引よりも増

加すると考えられる。そこで、取引の安全の観点からは、行為能力の規定を制限的に適用すべきではないかとの考えもあり得るだろうが、このような問題は、非対面の取引一般にいえることであり、電子商取引についてのみ例外を認める必要性は認められない。

## 2. 取消権の制限

もっとも、民法第 20 条によれば、未成年者が取引の相手方に対し、成年であるか、又は法定代理人の同意があると誤信させるために詐術を用いたときには、当該未成年者は当該意思表示を取り消すことができないとされている。そして、詐術を用いたときは、制限能力者であることを誤信させるために、相手方に対し積極的術策を用いた場合に限るものではなく、制限能力者がふつうに人を欺くに足りる言動を用いて相手方の誤信を誘起し、又は誤信を強めた場合をも含んでいると解されている（最高裁昭和 44 年 2 月 13 日第一小法廷判決・民集 23 卷 2 号 291 頁）。

したがって、事業者が電子商取引の際に画面上で年齢を確認する表示を設けるなど、年齢確認のための措置をとっているときに、未成年者が故意に虚偽の年齢を通知し、その結果、事業者が相手方を成年者と誤信した場合などは、当該未成年者は取消権を失う可能性もあると解される。

もっとも、詐術を用いたと認められるか否かは、単に未成年者が成年である旨回答したことだけをもって判断されるものではなく、事業者が故意にかかる回答を誘導したのではないかなど、最終的には取引の内容、商品の性質や事業者の設定する画面構成等個別の事情を考慮して、判断されるものと解される。

いずれにせよ相手方が未成年者であることによる取消しの可能性を完全に排除することは困難なため、取引金額と本人確認に要するコスト負担のバランスを考慮して、取引当事者は、合理的な相手方の確認を行うこととなる。

## (5) 管轄合意条項の有効性

### 【論点】

管轄の合意は書面によらなければならないとされている（民事訴訟法第 11 条第 2 項）が、書面によらないオンライン契約における管轄合意条項は有効といえるか。

### 【考え方】

管轄の合意は書面によらなければならない、オンライン契約の中の管轄合意条項については、効力は認められない。

### 【説明】

管轄の合意は、一定の法律関係に基づく訴えに関し、かつ、書面でなければその効力を生じない（民事訴訟法第 11 条第 2 項）ので、オンライン契約における管轄合意条項が裁判所を拘束することはないと解される。

したがって、管轄合意の対象とされた裁判所に訴訟が提起されても、当該裁判所が法定管轄権をも有していたか、応訴管轄が生じた場合でない限り（民事訴訟法第 12 条参照）、管轄権を有することはなく、法定管轄権を有する裁判所に訴訟が提起された場合には、そのまま審理が行われることとなると考えられる。



## 2. 新たな取引の発展に伴う問題

### 電子商店街（サイバーモール）運営者の責任

#### 【論点】

サイバーショップとの取引で損害を受けた買主に対してサイバーモール運営者が責任を負う場合があるか。

（例）消費者が、サイバーモールに出店していたサイバーショップから商品を購入したところ、商品に欠陥があったが、ショップは行方不明となり連絡が取れない。サイバーモール運営者に対して、損害賠償を請求することができないか。

#### 【考え方】

##### <I> 原則：責任を負わない

通常、サイバーモール運営者と買主との間には直接の契約関係がないので、個別のサイバーショップとの取引によって生じた損害について、サイバーモール運営者は原則として責任を負わない。

##### <II> 例外：責任を負う場合もある

i)サイバーショップによる営業をサイバーモール運営者自身による営業と一般の買主が誤って判断するのやむを得ない外観が存在し（外観の存在）、ii)その外観が存在することについてサイバーモール運営者に責任があり（帰責事由）、iii)買主が重大な過失なしに営業主を誤って判断して取引をした（相手方の善意無重過失）場合には、商法第 23 条の類推適用によりサイバーモール運営者が責任を負う場合もあり得る。

（責任を負う可能性がある例）

- ・サイバーモールのホームページで商品を選択すると、そのままモールの統一フォームによる購入画面に移動するような画面構成の場合
- ・
- ・

（責任を負わないと思われる例）

- ・ウェブ上に顧客が、通常、認識することができるような形で「ショップはそれぞれ運営する出店者が自己の責任において運営しており、特に明示している場合を除いて、当社と関連会社が管理または運営しているものではありません」と表示をしている場合

：

## 【説明】

### 1．問題の所在

サイバーモール上の個別のサイバーショップとの取引で損害を受けた買主は、当該店舗に対して契約上の責任を追及することができるが、このほかサイバーモール運営者に対しても責任を追及することができるか。通常、サイバーモール運営者と買主との間には直接の契約関係がないので、個別のサイバーショップとの取引によって生じた損害について、サイバーモール運営者が責任を負うことはないものと考えられる。しかしながら、サイバーモールとサイバーショップとの関係で買主たる消費者がサイバーモール運営者を売主と誤認するような状況が作られていた場合などにサイバーモール運営者が表見法理により契約上の責任を負うことが考えられないだろうか。

### 2．商法第 23 条の類推適用

この点、参考となる裁判例として、スーパーマーケットに出店しているテナントと買物客との取引に関して、出店契約を締結することにより営業主体がスーパーマーケットであると誤認するのやむを得ない外観を作出したことに関与したという理由から、商法第 23 条の類推適用により、スーパーマーケットの経営会社が名板貸人と同様の責任を負うとしたものがある（最高裁平成 7 年 11 月 30 日第一小法廷判決・民集 49 巻 9 号 2972 頁）。

商法第 23 条適用の要件は、i)名板貸人が営業主であるという外観の存在、ii)名義使用の許諾という名板貸人の帰責事由の存在、iii)取引の相手方が重大な過失なくして名板貸人が営業主であると誤認したことであるが、本判決は、ii)の名義使用の許諾はないが、上記のような外観の作出に関与した場合について、商法第 23 条の理論的前提である外観法理を前提に、同条の類推適用を認めたものである。

### 3．サイバーモール運営者が責任を負う可能性

サイバーモールにおいても、i)出店者の営業がサイバーモール運営者の営業であると一般の顧客が誤認するのやむを得ない外観が存在し、ii)当該外観の作出にサイバーモール運営者に帰責事由があり、iii)当該顧客が重大な過失なくして営業主を誤認して取

引をした場合には、商法第 23 条の類推適用によりサイバーモール運営者が責任を負う場合もあり得るものと解される。

なお、例えばウェブ上に顧客が、通常、認識することができるような形で「ショップはそれぞれ運営する出店者が自己の責任において運営しており、特に明示している場合を除いて、当社及び関連会社が管理又は運営しているものではありません」といった表示をしている場合であれば、当該表示はサイバーモール運営者の責任を否定する有力な根拠となると考えられる。

いずれにせよサイバーモール運営者が、商法第 23 条の類推適用により責任を負うか否かについては、サイバーモールの外観、サイバーモール運営者の運営形態のみならず、外観作出の帰責性の有無の判断要素としてサイバーショップの営業への関与の程度等をも総合的に勘案して判断されることになろう。

### 3 . 消費者保護

#### (1) 消費者の操作ミスによる錯誤

##### 【論点】

BtoC の電子契約では、事業者側が、消費者の申込み内容などの意思を確認する措置を設けていない場合には、原則として、操作ミスによる契約は無効となる（電子契約法第 3 条）。反対に、事業者側が、確認措置を設けていれば、消費者に重大な過失があった場合、契約成立を主張できるが、この「確認措置」とはどのようなものか。

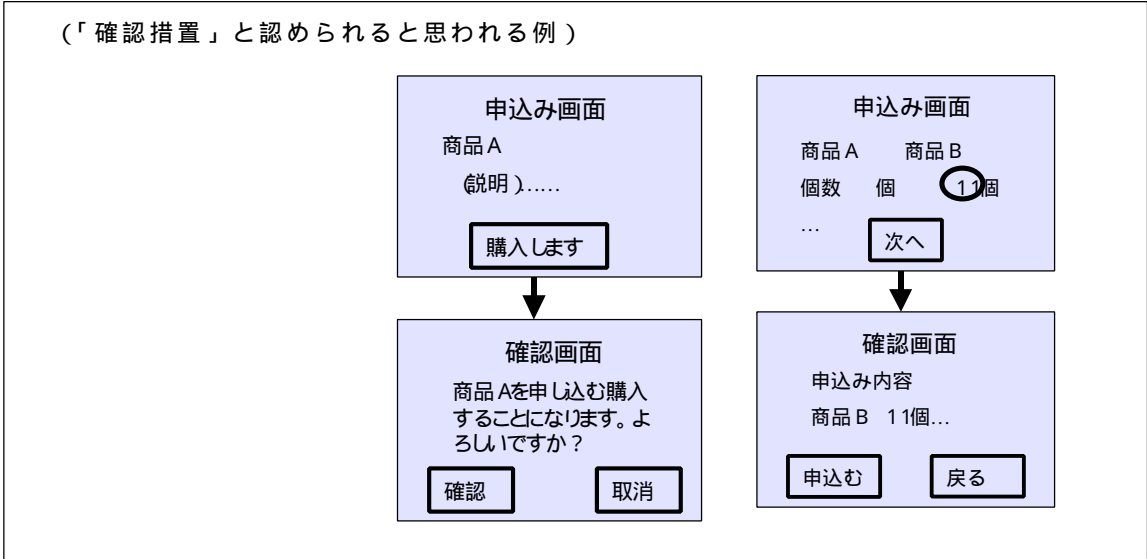
##### 【考え方】

#### <I> 消費者の操作ミスの救済

BtoC の電子契約では、i)消費者が申込みを行う前に、消費者の申込み内容などを確認する措置を事業者側が講じた場合、ii)消費者自らが確認措置が不要である旨意思の表明をした場合、を除き、要素の錯誤に当たる操作ミスによる消費者の申込みの意思表示は無効となる（電子契約法第 3 条）。i)、ii)の場合、消費者に重過失があれば、事業者は契約成立を主張できる（民法第 95 条ただし書）。

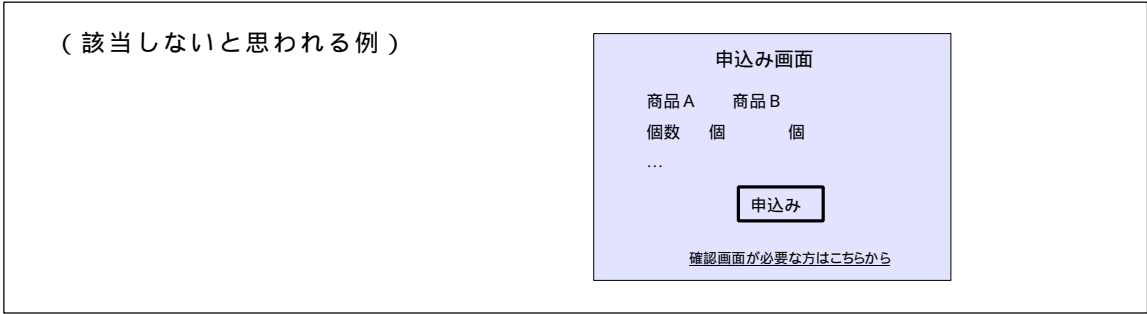
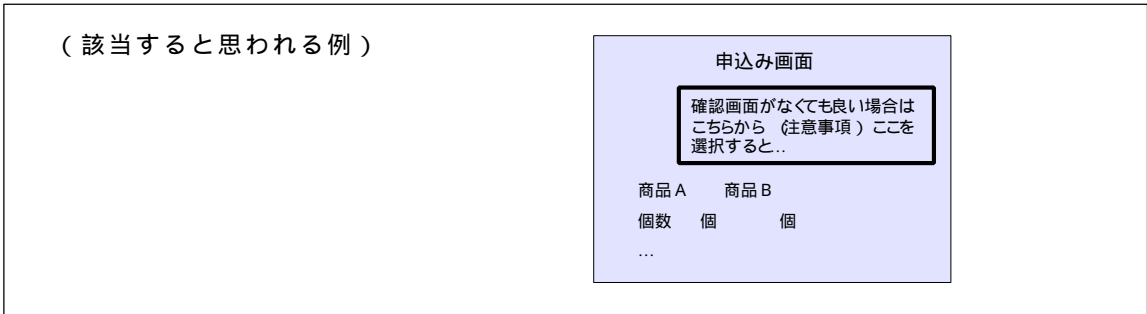
#### <II> 事業者が講じる「確認措置」

「確認を求める措置」としては、申込みを行う意思の有無及び入力した内容をもって申込みにする意思の有無について、消費者に実質的に確認を求めていると判断し得る措置になっている必要がある。例えば、i)あるボタンをクリックすることで申込みの意思表示となることを消費者が明らかに確認することができる画面を設定すること、ii)最終的な意思表示となる送信ボタンを押す前に、申込みの内容を表示し、そこで訂正する機会を与える画面を設定すること、などが考えられる。



<III> 消費者の意思の表明

消費者が自ら望んで確認措置が必要ないと積極的に選択する必要があり、その認定は慎重になされる。例えば、事業者によって同意するよう強制されたり、意図的に誘導されたりしたような場合には、そのような認定はなされないと思われる。



【説明】

1. 錯誤無効の特例措置

消費者がウェブ画面を通じて事業者が画面上に表示する手順に従って当該事業者との契約の申込みを行う際、意図しない申込み（例えば、全く申込みを行う意思がないにもかかわらず、操作を誤って申込みを行ってしまったような場合）や意図と異なる内容の申込み（例えば、操作を誤って申込みの内容を入力してしまったにもかかわらず、それを訂正しないままに内心の意思と異なる内容の申込みであると表示から推断される表示行為を行ってしまったような場合）を行った場合は、事業者が消費者に対して申込みを行う意思や申込みの内容について確認を求める措置を講じた場合及び消費者自らが申込みを行う意思や申込みの内容についての確認の機会が不要である旨の意思を表明をした場合を除き、民法第 95 条ただし書の規定は適用されず、消費者は、意図しない契約の申込みや意図と異なる申込みの意思表示を無効とすることができる（電子契約法第 3 条）。

意図しない申込みの例としては、キャンセルボタンと思って押したが、有料の契約の申込みボタンだった場合などがあり、意図と異なる内容の申込みの例としては、1 個のつもりが 11 個と入力して申込みボタンを押した場合などがある。

## 2．電子契約法第 3 条の「確認を求める措置」

事業者が消費者に対して申込みを行う意思や申込みの内容について画面上確認を求める措置を講じた場合には、電子契約法第 3 条本文の適用はなく、事業者は、民法第 95 条ただし書の規定により、消費者に意図しない申込みや意図と異なる申込みをしたことについて重大な過失があることを主張することができる（電子契約法第 3 条ただし書）。

この「確認を求める措置」としては、申込みを行う意思の有無及び入力した内容をもって申込みにする意思の有無について、消費者に実質的に確認を求めていると判断し得る措置になっている必要がある。

具体的には、次のようなものが考えられる。

- ・ あるボタンをクリックすることで申込みの意思表示となることを消費者が明らかに確認することができる画面を設定すること
- ・ 最終的な意思表示となる送信ボタンを押す前に、申込みの内容を表示し、そこで訂正する機会を与える画面を設定すること

## 3．電子契約法第 3 条の「意思の表明」

消費者自らが前記「確認を求める措置」を要しない旨の意思を表明した場合は、電子契約法第 3 条本文の適用はなく、事業者は、民法第 95 条ただし書の規定により、消費者に意図しない申込みや意図と異なる申込みをしたことについて重大な過失があることを主張することができる（電子契約法第 3 条ただし書）。

この「意思の表明」とは、消費者がその自主的な判断により、自ら積極的に確認措置の提供が必要でないことを事業者に明らかにするとの趣旨であり、その認定は慎重になされると考えられる。消費者が確認措置を要しないとは望んでいないにもかかわらず、事業者によってそれに同意するよう強制されたり、意図的に誘導されたりしたような場合は、ここでいう消費者の意思の表明には当たらない。例えば、確認措置を講じていない事業者が、一方的に「確認措置を要しない旨同意したものとみなす。」としているような場合や、「確認措置を必要としない旨表明いたします」というボタンをクリックしなければ商品を購入できないような場合はここでいう消費者の意思の表明には当たらない。要するに、各別かつ明示の方法により、消費者側の主体的意思が形成され、確認措置を不要とする意思の表明がされるものでなければならない。

なお、意思の表明の有無については、事業者が主張・立証責任を負担する。

(2) インターネット通販における分かりやすい申込画面の設定義務

【論点】

特定商取引法第 14 条で規制されている「顧客の意に反して契約の申込みをさせようとする行為」とは、インターネット通販においてはどのような行為か。

【考え方】

インターネット通販において、<I>あるボタンをクリックすれば、それが有料の申込みとなることを消費者が容易に認識できるように表示していない場合、<II>申込みをする際に、消費者が申込みの内容を容易に確認し、かつ、訂正できるように措置していない場合には、特定商取引法第 14 条により行政処分の対象となる。

<I> 有料の申込みとなることを表示していない場合

(該当しないと思われる例)

【画面例 1】  
・ステップ 1：商品の選択

商品広告

商品	商品 ×社製	価格 1,000 円	買い物かごに入れる
商品	商品 社	価格 1,200 円	買い物かごに入れる

商品	単価	数量	小計	
商品	1,000 円	1個	1,000 円	削除

買い物続ける
レジに進む

・ステップ 2：個人情報の入力

お届け先を記入下さい

氏名：

郵便番号： -

都道府県：

住所：

電話番号：

電子メールアドレス：

[次の画面へ](#)

ステップ 3：最終確認画面の表示

注文内容確認

注文内容を確認し、注文を確定して下さい(これが最後の手続きです。)  
下記の注文内容が正しいことを確認してください。  
〔注文を確定する〕ボタンをクリックするまで、実際の注文は行われません。

お届け先  
経済 太郎  
〒100-8901  
東京都千代田区霞が関 1-3-1 変更

支払方法  
カード ×××× - ×××× 変更  
有効期限:06/2002

注文明細

商品	単価	数量	小計
商品	1,000 円	1個	1,000 円
送料			200 円
消費税			60 円
合計			1,260 円

変更注文を確定する

発送方法：宅配便 変更

TOPに戻る(注文は確定されません)

ステップ 4：最終的な申込み

ご注文ありがとうございました。



【画面例 2】

**注文書**

ご希望の商品を選んで下さい。

(1)

(2)

お届け先

氏 名:

郵便番号:  -

都道府県:

住 所:

電話番号:

電子メールアドレス:

(該当するおそれがある例)

【画面例 3】

( 1 ページ )

**申込フォーム**

- ・ 申込手順
- ・ 返品について
- ・ お支払い方法

( 2 ページ )

・ 贈答品について

・ 申し込み

商品 A      商品 B  
( チェックを入れて下さい。 )

商品 01   商品02   商品03  
.....

商品 13   商品14   商品5  
( チェックを入れて下さい。 )

( 3 ページ )

申込者名

e-mail

郵便番号

住所

電話番号

・ お支払い方法

銀行振り込み   郵便振替   代金引換  
( チェックを入れて下さい。 )

・ 送料

銀行振り込み、郵便振替は全国一律 円  
代金引換の場合は地域によって異なります ( 別表参考 )。送料に代金引換手数料 円が加算されます。

## <II> 確認・訂正機会の提供がない場合

(該当しないと思われる例)

【画面例4】

**ご注文内容確認**

この内容で店主にメールが送信されます。  
この内容で良ければ、(この内容で注文する)を、修正したい部分があれば、ブラウザのボタンで前のページに戻って下さい。

ご注文商品

商品	単価	数量	小計
商品	1,000円	1個	1,000円
送料			200円
消費税			60円
合計			1,260円

ご注文者  
氏名:  
住所:  
電話番号:  
E-MAIL:  
お届け先

ご注文者と同じ  
お支払い方法  
代金引換

(該当するおそれがある例)

【画面例5】

《画面1》

商品名	画像	商品説明	価格
			¥ 5,340

《画面2》

代引き  
送り先の住所を入力してください。

お名前

会社名

住所

郵便番号

電話番号

E-MAIL

【画面例6】

商品の注文フォームです  
以下をもちろん記入して「商品申込みをする」ボタンをクリックして下さい。

お名前

ふりがな

ご住所 〒

都道府県

住所

電話番号

---

ご注文

商品名A  ¥ 10,000

商品名B  15,000

サイズ

---

ご注文

商品名A  ¥ 10,000

商品名B  15,000

サイズ

---

商品代金 円

消費税 円

合計金額 円

お支払い方法

ご注文ありがとうございました。

## 【説明】

### 1．特定商取引法第14条の規制

販売業者等が、顧客の意に反して売買契約若しくは役務提供契約の申込みをさせようとする行為をした場合において、取引の公正及び購入者等の利益が害されるおそれがあると認められるときは、経済産業大臣等は必要な措置をとるべきことを指示することができる（特定商取引に関する法律（以下「特定商取引法」という。）第14条）。

この「顧客の意に反して契約の申込みをさせようとする行為」とは、具体的には、インターネット通販において、i)あるボタンをクリックすれば、それが有料の申込みとなることを消費者が容易に認識できるように表示していないこと（特定商取引に関する法律施行規則第16条第1項第1号）、ii)申込みをする際に、消費者が申込みの内容を容易に確認し、かつ、訂正できるように措置していないこと（同項第2号）を指す。

### 2．「顧客の意に反して契約の申込みをさせようとする行為」に係るガイドライン

経済産業省は、「顧客の意に反して契約の申込みをさせようとする行為」に係るガイドラインを策定し、以下のような解釈基準を示している。

#### (1) 申込みとなることの表示（第1号）

i) 以下のような場合は、一般に、第1号で定める行為に該当しないと考えられる。

ア) 申込みの最終段階において、「注文内容の確認」といった表題の画面（いわゆる最終確認画面）が必ず表示され、その画面上で「この内容で注文する」といった表示のあるボタンをクリックしてはじめて申込みになる場合。

イ) いわゆる最終確認画面がない場合であっても、以下のような措置が講じられ、最終的な申込みの操作となることが明示されている場合。

a) 最終的な申込みにあたるボタンのテキストに「私は上記の商品を購入（注文、申込み）します」と表示されている。

b) 最終的な申込みにあたるボタンに近接して「購入（注文、申込み）しますか」との表示があり、ボタンのテキストに「はい」と表示されている。

ii) 以下のような場合は、第1号で定める行為に該当するおそれがある。

ア) 最終的な申込みにあたるボタン上では、「購入（注文、申込み）」などといった用語ではなく、「送信」などの用語で表示がされており、また、画面上の他の部分でも「申込み」であることを明らかにする表示がない場合。

イ) 最終的な申込みにあたるボタンに近接して「プレゼント」と表示されているなど、有償契約の申込みではないとの誤解を招くような表示がなされている場合。

(2) 確認・訂正機会の提供(第2号)

i) 以下の I 及び II の両方を満たしているような場合は、一般に、第2号で定める行為に該当しないと考えられる。

I 申込みの最終段階で、以下のいずれかの措置が講じられ、申込み内容を容易に確認できるようになっていること。

a) 申込みの最終段階の画面上において、申込み内容が表示される場合。

b) 申込みの最終段階の画面上において、申込み内容そのものは表示されていない場合であっても、「注文内容を確認する」といったボタンが用意され、それをクリックすることにより確認できる場合。あるいは、「確認したい場合には、ブラウザの戻るボタンで前のページに戻って下さい」といった説明がなされている場合。

II I により申込み内容を確認した上で、以下のいずれかの措置により、容易に訂正できるようになっていること。

a) 申込みの最終段階の画面上において、「変更」「取消」といったボタンが用意され、そのボタンをクリックすることにより訂正ができるようになっている場合。

b) 申込みの最終段階の画面上において、「修正したい部分があれば、ブラウザの戻るボタンで前のページに戻って下さい」といった説明がなされている場合。

ii) 以下のような場合は、第2号で定める行為に該当するおそれがある。

ア) 申込みの最終段階の画面上において、申込み内容が表示されず、これを確認するための手段(「注文内容を確認」などのボタンの設定や、「ブラウザの戻るボタンで前に戻ることができる」旨の説明)も提供されていない場合。

イ) 申込みの最終段階の画面上において、訂正するための手段(「変更」などのボタンの設定や、「ブラウザの戻るボタンで前のページに戻ることができる」旨の説明)が提供されていない場合。

ウ) 申込みの内容として、予め(申込み者が自分で変更しない限りは)、同一商品を複数申し込むように設定してあるなど、一般的には想定されない設定がなされており、よほど注意していない限り、申込み内容を認識しないままに申し込んでしまうようになっている場合。

(参考)いかなる画面が上記場合に該当するか否かについて、ガイドラインが公表されている(インターネット通販における「意に反して契約の申込みをさせようとする行為」に係るガイドライン)。

( <http://www.meti.go.jp/kohosys/press/0002003/index.html> )

### (3) ウェブ上の広告表示の適正化

#### ア) 景品表示法による規制

##### 【論点】

ウェブ上の広告について、景品表示法第4条の不当表示として禁止されるのはどのような場合か。

##### 【考え方】

事業者がホームページ上で行う、自己の供給する商品またはサービスの内容や取引条件についての表示も景品表示法の規制対象となる。

(不当表示として問題となる例)

- ・ コンピュータを無料でリースすると表示しているが、リース料とは別の名目で料金を徴収されたため、無料ではなかった。
- ・ コンピュータウイルス駆除ソフトについて、全てのウイルスに対応し、かつ100%の発見率と表示しているが、実際には全てのウイルスに対応していなかった。
- ・

##### 【説明】

#### 1. 景品表示法第4条の不当表示

不当景品類及び不当表示防止法(以下「景品表示法」という。)第2条第2項に規定する同法の規制の対象となる「表示」にはインターネット等情報処理の用に供する機器による広告も含まれる。すなわち、事業者がホームページ上で行う、自己の供給する商品又はサービスの内容や取引条件についての表示も景品表示法の規制対象となる。

景品表示法上の不当表示として問題となる例には次のようなものがある。

- ・ コンピュータを無料でリースすると表示しているが、リース料とは別の名目で料金を徴収されたため、無料ではなかった。
- ・ コンピュータウイルス駆除ソフトについて、全てのウイルスに対応し、かつ100%の発見率と表示しているが、実際には全てのウイルスに対応していなかった。
- ・ このほか、消費者が商品やサービスを選択する時の基準としている重要な情報の中で、事業者にとって有利な点を強調し不利な点を隠すような表示や、インターネットによる情報サービスの提供について、有料であると表示されていないにもかかわらず、後で料金が請求されるような場合などのように、表示しないことあるいは見にくくすることによって、一般消費者をして商品又はサービスの品質や取引条件等の重要な部

分について誤認させるような場合についても、他の表示とも絡んで不当表示として景品表示法上の問題となることがある。

## 2. ガイドラインの公表

なお、公正取引委員会は、消費者向け電子商取引に関して、消費者保護の観点から電子商取引上の表示に対する景品表示法上の対応や消費者に分かりやすい表示のあり方について「消費者向け電子商取引への公正取引委員会の対応について - 広告表示問題を中心に - 」を公表している。

( <http://www.jftc.go.jp/pressrelease/01.january/010119.pdf> )

## イ) 特定商取引法による規制

### 【論点】

ウェブ上の広告について、特定商取引法第 11 条、第 12 条はどのように適用されるか。

### 【考え方】

インターネット上で特定商取引法の指定商品等を販売する事業者は、同法の広告規制に従って、<I>一定事項を表示しなければならず（第 11 条）、また、<II> 誇大広告が禁止されている（第 12 条）。

#### <I> 表示義務

（表示を要する事項）

- ・商品・サービス等の販売価格、送料
- ・商品・サービス等の代金の支払時期と方法
- ・商品・サービス等の引き渡し時期
- ・商品・サービス等の返品可否と条件
- ・販売業者の氏名、住所と電話番号（法人の場合は、このほかに代表者または業務責任者の氏名）
- ・申込みの有効期限があるときは、その期限
- ・商品・サービス等の販売価格以外に購入者等が負担すべき金銭があるときは、その内容と額
- ・商品に隠れた瑕疵がある場合の販売業者の責任についての定めがあるときは、その内容
- ・商品の販売数量の制限その他の特別の商品・サービス等の販売条件があるときは、その内容
- ・電子メールで広告をするときは、電子メールアドレス
- ・電子メールで広告をするときは、消費者がメールの受け取りを希望しない場合にその連絡を行う方法（連絡方法がない場合には、電子メールの件名欄の冒頭に「！連絡方法無！」、かつ電子メール本文にもその旨）
- ・消費者からの請求ないし承諾を得ないで電子メールで広告するときは、電子メールの件名欄の冒頭に「！広告！」、かつ電子メール本文にもその旨

#### <II> 誇大広告の禁止

（誇大広告が禁止される事項）

- ・商品の性能・品質・効能、役務の内容・効果、権利の内容・権利に係る役務の効果
- ・商品の引き渡し・権利の移転後におけるその引取り・返還についての特約
- ・商品・権利・役務、販売業者・役務提供事業者、販売業者・役務提供事業者の営む事業についての国・地方公共団体等の関与（例えば、商品・事業者等についての「省認定」「県推薦」等の表示など）
- ・商品の原産地・製造地・製造者名
- ・上記(1)記載の事項

### 【説明】



## 1．特定商取引法の広告規制

インターネット上で申込みを受けて行う取引は、特定商取引法上の通信販売に該当する。したがって、同法の「指定商品、権利、役務」(同法第2条第4項、特定商取引に関する法律施行令別表第1～3)を販売する事業者は、特定商取引法の広告規制(同法第11条、第12条)に従って広告表示を行う義務があり、違反した場合は行政処分や罰則の適用を受ける。

## 2．表示義務

販売業者は、広告をするときに次の事項を表示しなければならない(特定商取引法第11条、特定商取引に関する法律施行規則第8条)。

- ・商品・サービス等の販売価格、送料
- ・商品・サービス等の代金の支払時期及び方法
- ・商品・サービス等の引き渡し時期
- ・商品・サービス等の返品可否と条件
- ・販売業者の氏名、住所及び電話番号(法人の場合は、このほかに代表者又は業務責任者の氏名)
- ・申込みの有効期限があるときは、その期限
- ・商品・サービス等の販売価格以外に購入者等が負担すべき金銭があるときは、その内容及び額
- ・商品に隠れた瑕疵がある場合の販売業者の責任についての定めがあるときは、その内容
- ・商品の販売数量の制限その他の特別の商品・サービス等の販売条件があるときは、その内容
- ・電子メールで広告をするときは、電子メールアドレス
- ・電子メールで広告をするときは、消費者がメールの受け取りを希望しない場合にその連絡を行う方法(連絡方法がない場合には、電子メールの件名欄の冒頭に「！連絡方法無！」、かつ電子メール本文にもその旨)
- ・消費者からの請求ないし承諾を得ないで電子メールで広告をするときは、電子メールの件名欄の冒頭に「！広告！」、かつ電子メール本文にもその旨

なお、インターネット上のホームページなどパソコン画面上等の広告では、上記事項

の全てを確認するには画面のスクロールや画面の切替を要さずにすむよう記載することが望ましいが、特に販売業者の氏名、住所及び電話番号（法人の場合はさらに代表者又は業務責任者の氏名）については、画面上に広告の冒頭部分を表示したときに認識できるように記載すべきである。やむを得ず、冒頭部分への記載を行うことができないときには、冒頭部分から容易に記載箇所への到達が可能となるような方法又は契約の申込みのための画面に到達するにはこれらの事項を画面の経由を要するような方法を予め講ずるべきである。

### 3．誇大広告の禁止

販売業者は、広告をするときに次の事項について著しく事実に相違する表示をしたり、実際のものよりも著しく優良・有利であると誤認させるような表示をしてはならない（特定商取引法第12条、特定商取引に関する法律施行規則第11条）。

- ・商品の性能・品質・効能、役務の内容・効果、権利の内容・権利に係る役務の効果
- ・商品の引き渡し・権利の移転後におけるその引取り・返還についての特約
- ・商品・権利・役務、販売業者・役務提供事業者、販売業者・役務提供事業者の営む事業についての国・地方公共団体等の関与（例えば、商品・事業者等についての「省認定」「県推薦」等の表示など）
- ・商品の原産地・製造地・製造者名
- ・前記2．記載の事項

## 第2．情報財取引

### 1．ライセンス契約

プログラムやデジタルコンテンツといった情報財は、通常の売買契約の方式によるほか、ユーザーと情報財ベンダー（以下「ベンダー」という。）との間において当該財の使用を許諾するというライセンス契約（使用許諾契約と呼ばれることも多い。）を締結するという方式による取引が行われることが多い。ここでは、ライセンス契約に関する法律上の問題点について検討する。

なお、ライセンス契約とは、ライセンサ（ベンダー）がライセンシ（ユーザー）に対して、情報財を一定範囲で使用収益させることを約し、ライセンシがこれに同意することによって成立する契約をいう。本準則では、実務上、通常行われている有償のライセンス契約のみを対象とする。

また、ライセンス契約の対象となる情報財とは、音、映像（画像）その他の情報であって、コンピュータを機能させることによって利用可能となる形式（いわゆるデジタル形式）によって記録可能な情報を指すものとする。具体的には、プログラムその他のコンピュータに対する指令、コンピュータによる情報処理の対象となるデータ（音楽、映画、コンピュータグラフィックス等のいわゆるデジタルコンテンツ等）が含まれる。また、いわゆるカスタムメイド型の情報財については、当事者間における契約によってその内容や条件等が定まるものと考えられることから、ここでは完成品として市場で流通する情報財のみを検討の対象とする。

## (1) 契約の成立とユーザーの返品可否

### ア) 情報財が媒体を介して提供される場合

#### 【論点】

媒体型のパッケージソフトウェアを販売店から購入する場合、代金支払い後に初めてライセンス契約内容を見ることが可能となることが多く、ライセンス契約内容に同意できない場合に返品・返金できないかが問題となっている。その際、i)シュリンクラップ契約または ii)クリックオン契約のいずれかの方法によってライセンス契約の締結が求められることが多いが、果たしてどのような場合に返品・返金が可能か。

#### 【考え方】

##### <1> 原則

ライセンス契約の内容に不同意であるユーザーは、返品・返金が可能であると解するのが合理的である。その根拠としては、販売店とユーザー間の契約は、ユーザーがライセンス契約に同意しない場合、ユーザーに返品・返金を認める旨の黙示の合意がある契約であると解するほかない。

具体的には、シュリンクラップ契約とクリックオン契約の2つがよく用いられており、それぞれの場合について述べる。

##### i) シュリンクラップ契約の場合

ユーザーが、媒体の封（フィルムラップやシール等）の開封前に、ライセンス契約の内容を認識し、契約締結の意思をもって媒体の封を開封した場合は、ライセンス契約が成立（民法第526条第2項）しているため、不同意を理由とした返品は認められない。

したがって、フィルムラップやシール等が開封されていた場合は、販売店はフィルムラップやシール等における表示が十分であるかどうかを確認し、それが通常認識できるような形態であれば、返品に応じる必要はないと解される。

<p>(開封した場合返品できない(ライセンス契約が成立した)と思われる例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・媒体のフィルムラップやシール等にユーザーが開封前に通常認識できるような形態でライセンス契約の確認を求める旨の表示と開封するとライセンス契約が成立する旨の表示がなされているような場合</li> <li>・</li> </ul>
<p>(開封したとしても不同意ならば返品できる(ライセンス契約が成立していない)と思われる例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・媒体のフィルムラップやシール等にライセンス契約についての表示が全くない場合</li> <li>・媒体のフィルムラップやシール等にライセンス契約の内容の記載場所が表示されておらず、かつライセンス契約内容が容易に見つからない場合</li> <li>・</li> </ul>

## ii) クリックオン契約の場合

ユーザーが、画面上で「(ライセンス契約に)同意する」というボタンをクリックする前に、ライセンス契約の内容を認識し、契約締結の意思をもってクリックした場合は、ライセンス契約が成立(民法第526条第2項)しているため、不同意を理由とした返品は認められない。

なお、販売店等がクリックの有無を外見的に判断するのは困難であるのが通常であるが、何らかの手段によって契約が成立していることが判明する場合は、返品に応じる必要はないと解される。

<p>(同意ボタンをクリックした場合返品できない(ライセンス契約が成立した)と思われる例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・画面上でライセンス契約の内容を最後までスクロールさせた後に同意ボタンをクリックした場合</li> <li>・</li> </ul>
<p>(同意ボタンをクリックしたとしても不同意ならば返品できる(ライセンス契約が成立していない)可能性があると思われる例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ライセンス契約への同意を求める画面構成や同意ボタンがインストールを進める上での他の画面構成や他のボタンと外形的な差がなく、かつライセンス契約への同意についての確認画面もない場合</li> <li>・</li> </ul>
<p>(何らかの手段によって契約成立が判明する場合の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ライセンス契約に同意します」という欄に署名したユーザー登録葉書がベンダーに到着している場合</li> <li>・ライセンス契約がオンラインや電話で行われてベンダーに登録されている場合</li> <li>・</li> </ul>

## <II> 例外

### i) 販売店とユーザー間の契約が情報財の複製物の売買契約と解される場合

販売店とユーザー間の契約が情報財の複製物の売買契約と解される場合は、そもそもライセンス契約が存在しないものと解される。したがって、ライセンス契約に同意できない場合の返品の問題は生じない。ユーザーは

著作権法の規定に反しないかぎり情報財を自由に使用することが可能であり、仮に代金支払後にライセンス契約が明示されたとしても、ユーザーは何ら拘束されない。

(ライセンス契約は存在せず情報財を自由に使用できると思われる例)  
・ユーザーがライセンス契約の存在を認識せず、外箱にもライセンス契約の存在について何ら記載されておらず、また販売店もユーザーに対してライセンス契約の存在を伝えなかった場合  
・  
・

## ii) 販売店での代金支払時にライセンス契約内容が明示されている場合

ライセンス契約内容を認識した上で、代金を支払ったと解される場合は、返品・返金はできない。

(ライセンス契約に既に同意したとして返品・返金できないと思われる例)  
・外箱に契約内容がユーザーが通常認識するような十分な字の大きさと記載されている場合  
・代金支払時に販売店がユーザーに対してライセンス契約内容に同意したかどうかを確認したような場合  
・

## iii) ライセンス契約に不同意であっても返金できない旨明示されている場合

ライセンス契約内容に不同意のときも返品できない旨明示されている場合であっても、ユーザーがこれに対して個別に同意した上、代金を支払った場合を除き、ライセンス契約に不同意のユーザーは販売店に返品することができない。

(ライセンス契約に不同意であっても返品することができないと思われる例)  
・販売店での代金支払時に、販売店がユーザーに対してライセンス契約に不同意であっても返品できないことをユーザーに確認し、ユーザーがこれに同意した場合  
・  
・

(ライセンス契約に不同意である場合は返品することができるとされる例)  
・ライセンス契約に不同意の場合でも返品できない旨が、代金支払時には明示はなく、パッケージの開封後に初めて明示されたような場合  
・  
・

## 【説明】

### 1. 問題の所在

情報財の取引の中でも、CD-ROM等の媒体を介して販売店を通じて行われるものにおいては、ライセンス契約条件をライセンサが一方的に定め、媒体の引き渡し時点では契約条件について明示の合意がなされないまま、フィルムラップやシール等を破った時

点やプログラム等を初めて起動しライセンス契約締結画面に同意した時点等、代金支払時よりも後の時点でライセンス契約が成立するものとしている（前者はシュリンクラップ契約、後者はクリックオン契約という。）取引慣行がある。このような場合に、どの段階でライセンス契約が成立しているか、ユーザーがライセンス契約の条件に同意できない場合、返品することで返金に応じてもらえるかなどについて、必ずしも明確でない。

そこで、本項では、媒体を介した取引について、取引当事者間の契約内容を検討する。

## 2．販売店とユーザーとの間の契約内容

ユーザーが店頭で対価を支払って媒体を介して情報財の引き渡しを受けた場合、契約当事者の合理的意思解釈として、i) 情報財の複製物の売買契約と解される場合と、ii) 販売店がユーザーに対してライセンス契約を締結することができる地位及び媒体・マニュアル等の有体物を引き渡すことを内容とする契約（以下「提供契約」という。）と解される場合がある。i)と ii)のどちらの契約と解されるかは、情報財取引に関する一般的な認識等様々な事情を総合考慮して決定されるものであるが、少なくとも、ユーザーが通常認識し得るような形態で媒体の外箱（パッケージ）にライセンス契約締結の必要性が明示されている場合や、販売店がライセンス契約締結の必要性について口頭で説明している場合であれば、ii)の提供契約と解される可能性が高い。

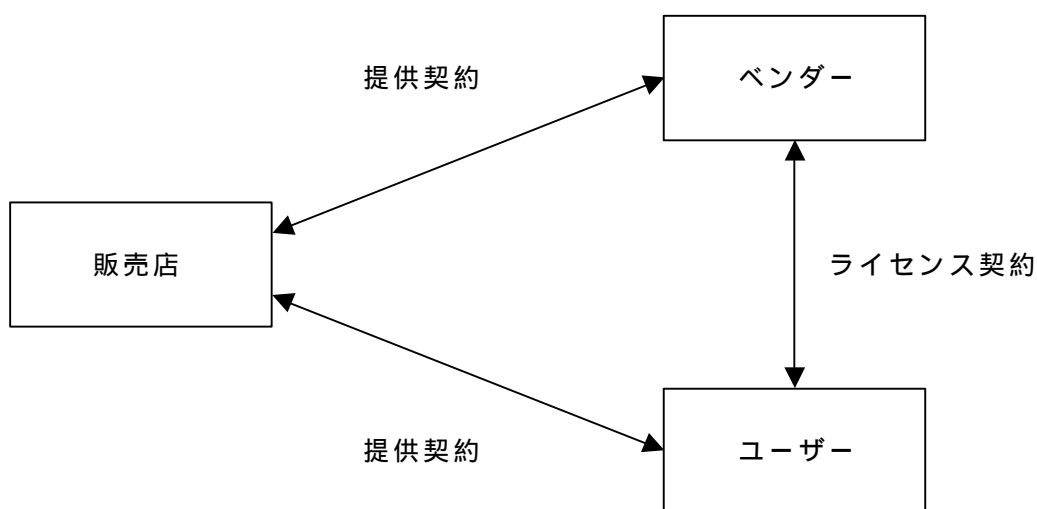
まず i)の情報財の複製物の売買契約と解される場合、代金支払時にその存在すら合意されていない契約にユーザーが拘束されることは相当でないので、この場合は、ライセンス契約は存在せず、購入したユーザーは著作権法の規定に反しない限り当該情報財を自由に使用することができる。具体的には、技術的保護手段の回避による場合などを除き私的使用を目的とする複製が可能であり（著作権法第30条第1項）、また、例えばプログラムについては、必要と認められる限度において複製又は翻案が可能である（著作権法第47条の2第1項）。また、そもそもライセンス契約自体存在しないので、ライセンス契約の条件に同意できない場合の返金の問題も生じない。

なお、ライセンス契約締結の必要性について合意していないにも関わらず、例えば、外箱の中にライセンス契約書が封入されている場合等、購入後にライセンス契約が明示されたとしても、通常、そのことによって、何らかの法的効果が発生することはないものと解される。

次に ii)の提供契約は、販売店からユーザーに対して、ライセンス契約を締結すること

によって情報財を使用することができる権利、すなわち、ライセンス契約を締結することができる地位を移転するとともに媒体・マニュアル等の有体物を引き渡すものであり、両者が一体となった契約であると解される。

この場合、ユーザーは販売店との間で提供契約を締結し、次にベンダーとの間で情報財の使用を許諾するライセンス契約を締結するという、2つの異なった契約を締結することとなる。ユーザーは後者のライセンス契約に基づいて情報財を使用することができることとなる（下図参照）。



### 3. ライセンス契約の成立要件及び成立時期

前記2.ii)の場合、すなわち、販売店とユーザーとの間の契約が提供契約である場合は、さらに、ア)ライセンス契約の内容が提供契約締結時（代金支払時）より前に明示される場合、イ)提供契約締結時（代金支払時）より後に明示される場合に分けられる。それぞれいつの時点でライセンス契約が成立するものと解されるであろうか。

媒体を介して情報財を取引する場合、ベンダーとユーザーとの間のライセンス契約は隔地者間の契約に当たるので、契約が成立するにはユーザーの承諾の意思表示が必要となるのが原則であるが、申込者の意思表示又は取引上の慣習により承諾の通知を必要としない場合には、承諾の意思実現行為があれば契約が成立する（民法第526条第2項）。これは申込者の意思表示又は取引上の慣習により、意思実現行為が承諾者の通知と等置できるからであり、ライセンス契約の成立についても、この意思実現行為による契約の成立を認めることができると解される。



まずア)の場合、ユーザーがライセンス契約の内容を認識した上で、提供契約の代金を支払うことが、ライセンス契約の承諾の意思実現行為と解されるため、提供契約締結と同時にライセンス契約も成立する。例えば、外箱にユーザーが購入時に通常認識するような字の大きさに契約内容が記載されている場合や、代金支払時に販売店がユーザーに対してライセンス契約内容に同意したかどうかを確認したような場合が考えられる。

次にイ)の場合、提供契約締結時にはライセンス契約の内容が明示されていない以上、ライセンス契約の成立する時期は、これよりも後となる。現在取引慣行となっているシュリンクラップ契約やクリックオン契約について、ライセンス契約が成立するか否かはユーザーに意思実現行為が存在するか否かの問題となる。

まずシュリンクラップ契約の場合、フィルムラップやシール等を開封する行為が意思実現行為に該当するか否かであるが、ユーザーが開封前にライセンス契約の内容を認識し、契約締結の意思をもって開封した場合は、ライセンス契約が成立するものと解される。例えば、ユーザーが開封前に通常認識できるような形態でフィルムラップやシール等にライセンス契約の確認を求め開封するとライセンス契約が成立する旨の表示がなされているような場合、開封することを意思実現行為とみなし、ライセンス契約の成立が認められることが多いと解される。しかし、フィルムラップやシール等にライセンス契約についての表示が全くない場合や、フィルムラップやシール等にライセンス契約の内容の記載場所が表示されておらず、かつライセンス契約内容が容易に見つからない場合は、開封したとしてもライセンス契約の成立が認められないと解される。

次にクリックオン契約の場合、画面上で「(ライセンス契約に)同意する」というボタン(以下「同意ボタン」という。)をクリックすることが意思実現行為に該当するか否かであるが、ユーザーがクリックする前にライセンス契約の内容を認識し、契約締結の意思をもってクリックした場合は、ライセンス契約が成立するものと解される。例えば、画面上でライセンス契約の内容をスクロールさせ、最後までスクロールしなければ同意ボタンをクリックできないような画面構成をとる等、ユーザーが同意ボタンをクリックする前に契約内容を通常認識できるような表示となっている場合、ライセンス契約の成立が認められることが多いと解される。しかし、ライセンス契約への同意を求める画面構成や同意ボタンがインストールを進める上での他の画面構成や他のボタンと外形的な差がなく、かつライセンス契約への同意についての確認画面もない場合は、ライセンス契約の成立が認められない可能性があるとして解される。

#### 4. ライセンス契約の条件に不同意の場合の提供契約解除の可否

前記3.イ)の場合、すなわち、ライセンス契約の内容が提供契約締結時（代金支払時）より後に明示される場合、ライセンス契約の内容にユーザーが同意できない場合、販売店に返品して、既に支払った対価の返還を求めることができるか否か問題となる。

ライセンス契約と提供契約は、本来別個独立した契約であるが、提供契約の主たる目的は、ユーザーが情報財を使用することであり、ライセンス契約と提供契約とは極めて牽連性が高いと考えられ、また、提供契約の対価の大半は、ライセンス契約を締結することができる地位、すなわち、情報財を使用することができる権利に充てられるものと考えられることから、ライセンス契約の条件に同意しないユーザーは、販売店に返品して、既に支払った代金の返還を求めることができるものと解するのが契約当事者の意思に合致しており、合理的である。その根拠として、現行法の解釈としては、提供契約においては、ユーザーがライセンス契約に同意しない場合、ユーザーに解除権を認める旨の黙示の合意があるものと解するほかないであろう。

この解除権の行使可能な期間については、特段の合意がない限り、10年（民法第167条第1項）ないし5年（商法第522条）となる。

また、解除権を否定する合意がない限り、提供契約においては、黙示の解除権があるものと認められるものとするれば、仮に外箱開封後に返品を認めない旨の表示があっても、解除権が否定されることにはならないものと解される。

なお、既にライセンス契約が成立している場合には、ライセンス契約に不同意であることを理由とする解除権を行使できないので、返品は認められない。問題は、販売店がどのようにしてライセンス契約成立の有無を判断するかである。

まず、シュリンクラップ契約の場合は、a)フィルムラップやシール等が開封されていた場合と、b)開封されていない場合があるが、後者の場合は、ライセンス契約が成立しておらず、販売店は返品に応じる必要があると解される。前者の場合は、フィルムラップやシール等における表示が十分であるかどうか問題となり、ユーザーが通常認識できるような形態でフィルムラップやシール等にライセンス契約内容の確認を求める旨及び開封するとライセンス契約が成立する旨が記載されていた場合は、既にライセンス契約が成立しているとして返品に応じる必要がないと解される。

次に、クリックオン契約の場合は、販売店がクリックの有無を外見的に判断すること

は困難であるのが通常であるが、何らかの手段、例えば、ベンダーにユーザー登録葉書が到着している場合や、ライセンス契約がオンラインや電話で行われてベンダーに登録されている場合等、販売店がベンダーに確認することによって、ライセンス契約成立の有無を確認することが可能であると考えられ、ライセンス契約が成立していることが判明する場合は、返品に応じる必要がないと解される。

さらに、ライセンス契約に不同意であるためにユーザーから返品を受けた販売店は、卸ないしベンダーに遡って返品を求めることができるかという問題がある。ライセンス契約締結の必要性が明示されており、かつ、ライセンス契約に不同意であっても返品できない旨の明示がない場合（後記5．参照）、ライセンス契約に同意しないユーザーは提供契約を解除することができるものと解されるのであるから、ベンダー、卸、販売店等もこれを前提に各当事者間の契約を締結していると考えられる。したがって、返品を受けた販売店は、卸ないしベンダーに返品を求めることができると解するのが合理的である。すなわち、ユーザーが、ベンダーが設定したライセンス契約の内容に同意できないことを理由に販売店に対して返品した場合には、販売店は卸に対して返品を求めることができること、販売店が卸に対して返品した場合には、卸はベンダーに対して返品を求めることができることについて、各当事者間において明示又は黙示の合意があるものと解される。

ところで、販売店から卸ないしベンダーへの返品が認められるのは、ユーザーがライセンス契約に不同意の場合であるが、卸やベンダーは、直接ユーザーと契約関係に立つものではないため、販売店からの返品請求がユーザーによるライセンス契約の不同意を理由とするものなのか否か明確には知り得ないであろう。そこで、関係当事者間での問題解決が迅速、円滑に図られるため、提供契約時にユーザーに対して、ライセンス契約に不同意のため提供契約を解除する場合は、その理由を記載した書面の提出を求める特約を合わせて締結しておくことが考えられる（かかる趣旨を明文化したものとして割賦販売法第30条の4第3項がある。）。

## 5．返品不可の特約が明示されている場合

ユーザーがライセンス契約に不同意の場合、提供契約において黙示の解除権があると解することが合理的であるが、不同意の場合であっても返品できないことが提供契約締結時、すなわち販売店での代金支払時に明示されていた場合であっても、返品は

認められるのだろうか。

単に返品不可の特約が明示されていることのみを理由として返品を認めないと解することは相当でなく、不同意の場合であっても返品できないことについて個別同意があったと認められる場合、例えば、返品ができない旨が販売店から口頭で説明されたり、媒体の外箱に明らかに認識できるような形態で明示されていた場合において、これに同意の上、代金を支払った場合に限り、ライセンス契約に不同意であることを理由として返品することができないものと解される。

なお、不同意の場合であっても返品できないことに対して個別同意したユーザーは、代金支払後に明示される契約内容に従ったライセンス契約を締結するよりほかない。もっとも、後記「(3)契約中の不当条項」に該当する契約条項については、その効力が認められない場合があることは当然であり、その場合、ユーザーは当該条項に拘束されることはない。

## イ) 情報財がオンラインで提供される場合

### 【論点】

オンライン契約画面を通じて、ベンダーのサーバーから情報財を有償でダウンロードした場合、ライセンス契約に同意できないことを理由として返品・返金できる場合はあるか。

### 【考え方】

#### <Ⅰ> オンライン契約時にライセンス契約内容が明示されている場合

ライセンス契約内容に同意の上、購入ボタン（契約ボタン）をクリックしたと解される場合は、返品・返金はできない。

(ライセンス契約に同意したものと認められ返金はできないと思われる例)

- ・画面上のライセンス契約内容の明示の方法として、同意ボタンや購入ボタンは十分に目立つものとし、単にダウンロードを進めるためのその他のボタンとは異なるように配した場合において、同意ボタンをクリックした後に購入ボタンをクリックした場合
- ・契約条項が長大で1画面に表示しきれない場合は、最後までスクロールしないと同意ボタンをクリックできないような構造とした場合において、同意ボタンをクリックした後に購入ボタンをクリックした場合

(ライセンス契約に同意しておらず返金が可能と思われる例)

- ・オンライン契約画面からリンクでライセンス契約画面に移行するような場合においてリンクが発見しづらく、かつ購入ボタンのクリックに際してライセンス契約についての同意が必要とされない場合

なお、いわゆる BtoC 契約においては、契約の申込み内容を確認する措置が講じられている場合、消費者自らが確認措置が不要である旨の意思の表明をしたときを除き、操作ミスによる消費者の申込みの意思表示は無効となる（電子契約法第3条、民法第95条）。

#### <Ⅱ> オンライン契約時にライセンス契約締結の必要性が明示されていない場合

ライセンス契約は存在しないものと解されるので、ライセンス契約に同意できないことを理由とする返品の問題は生じない。ユーザーは著作権法の規定に反しないかぎり自由に使用することが可能である。また、購入ボタンのクリック後（＝代金支払後）にライセンス契約が明示されたとしても、ユーザーは何ら拘束されない。

(ライセンス契約内容に拘束されないと思われる例)

・オンライン契約画面上にライセンス契約の存在について何ら表示されていない場合であって、ダウンロードしたファイルを解凍したら readme.txt というファイルが作成され、それを開くとライセンス契約内容が表示されるような場合  
・  
・

なお、オンライン契約画面においてライセンス契約締結の必要性については明示されたものの、購入ボタンをクリックする以前にはライセンス契約内容を見ることができず、ダウンロード後にはじめてライセンス契約内容が明らかとなるような場合も考えられる。しかし、画面上においてライセンス契約内容を表示させることは極めて容易であることを勘案すれば、このような販売方法は通常ないとも考えられるが、この場合もユーザーがライセンス契約に不同意の場合は、当然返品・返金を求めることができると解される。

## 【説明】

### 1．問題の所在

オンラインによる情報財の取引は、情報財の複製物たる媒体が引き渡されるのではなく、例えばベンダーのサーバーから無体物たる情報財がユーザーのハードディスク等へダウンロードされるものである。情報財がオンラインで提供される場合、ベンダーとユーザーとの間の契約自体もオンライン上で行われることが通例である。また、現在のところベンダー又はその代理店とユーザーとの間で直接取引されることが多い。

本項ではこのような形態のオンラインによる情報財の取引に関する契約の内容について検討する。

### 2．ライセンス契約締結の必要性が事前に明示されていない場合

オンラインによる契約画面上、ライセンス契約締結の必要性が明示されていない場合、原則として、前記「ア）情報財が媒体を介して提供される場合」における情報財の複製物の売買と同様、当該情報財を使用することについてライセンス契約による格別の条件を付さず、情報財をダウンロードすることによってユーザーは情報財の複製物の所有権を有することを目的とする契約を締結したものと解される。この場合、ユーザーは、著作権法の規定に反しない限り当該情報財を自由に使用することができ、ライセンス契約に同意できないことを理由とする返品の問題は生じない。また、情報財を購入する旨のボタン（以下「購入ボタン」という。）のクリック後（＝代金支払後）にライセンス契

約が明示されたとしても、ユーザーは何ら拘束されない。

### 3. ライセンス契約締結の必要性が事前に明示されている場合

オンラインによる契約画面上、ライセンス契約締結の必要性が明示されている場合は、原則として、ユーザーに対して情報財を提供（送信）するとともに当該情報財を一定範囲で使用収益させることを内容とする契約、すなわち、ライセンス契約に情報財の提供（送信）が付加された契約を締結することになると解される。

この場合、さらに、ア)代金支払前にライセンス契約の内容が明示される場合と、イ)代金支払前にライセンス契約の内容が明示されない場合に分けられるが、それぞれいつの時点でライセンス契約が成立するものと解されるであろうか。

まずア)の場合、代金支払前に契約画面上でライセンス契約の内容が明示され、当該ライセンス契約の内容に同意した上で購入ボタンをクリックした場合は、原則として、購入ボタンをクリックしたという情報が相手方のサーバーに記録された時点でライセンス契約を含めた契約全体が成立する（電子契約法第4条）。なお、いわゆる BtoC 契約においては、契約の申込み内容を確認する措置が講じられているとき、消費者自らが確認措置が不要である旨の意思の表明をしたときを除き、操作ミスによる消費者の申込みの意思表示は無効となる（電子契約法第3条、民法第95条）。

例えば、オンライン画面上のライセンス契約内容の明示の方法として、同意ボタンや購入ボタンは十分に目立つものとし、単にダウンロードを進めるためのその他のボタンとは異なるように配したり、仮に契約条項が長大で1画面に表示しきれない場合は、最後までスクロールしないと同意ボタンをクリックできないような構造とした場合において、同意ボタンをクリックした後に購入ボタンをクリックした場合は、ライセンス契約の成立が認められ、ユーザーは返金を求めることはできないと考えられる。

しかし、例えば、オンライン契約画面からリンクでライセンス契約画面に移行するような場合においてリンクが発見しづらく、かつ購入ボタンのクリックに際してライセンス契約についての同意が必要とされない場合等は、購入ボタンがクリックされていたとしても、ライセンス契約が成立しておらず、ユーザーは返金を求めることができると考えられる。

次にイ)の場合、ユーザーがライセンス契約の内容を認識し、契約締結の意思を持つ

て同意ボタンをクリックしたときにライセンス契約を含めた契約全体が成立する。例えば、ダウンロード後にファイルを解凍したら readme.txt というファイルが作成され、それを開くとライセンス契約内容が表示されるというような場合は、ライセンス契約内容に不同意のときは、契約が成立しないので、ユーザーは返品・返金を求めることができると解される。

ただし、オンライン契約の画面上にライセンス契約の内容を表示させることはベンダーにとって容易であること、すなわち、媒体を介する取引形態とは異なり、ライセンス契約条項の全文を明示することについての物理的な制約は通常ないことから、契約内容を事前に明示していない以上、前記2.と同様、当該情報財を使用することについてライセンス契約による格別の条件を付さず、情報財をダウンロードすることによってユーザーは情報財の複製物の所有権を有することを目的とする契約を締結したものと解される場合もあり得るとされる。



## (2) 重要事項不提供の効果

### 【論点】

情報財の提供に際してユーザーが代金を支払う際に、ベンダーまたは販売店はどのような情報を提供する必要があるか。またそのような情報を提供しなかった場合はどうなるか。

(例) 消費者が店頭で代金を支払って、販売店からプログラムの引き渡しを受けたが、プログラムが使用できるOS環境の情報を販売店から提供されていなかったため、実際にプログラムを使用できなかった。この場合、返品・返金は可能か。

### 【考え方】

#### <Ⅰ> 重要事項が不提供であった場合

情報財を使用する上で必要な情報(=重要事項)については、ベンダーまたは販売店がユーザーに提供する義務が課されると解される場合があり、それが提供されなかった結果、ユーザーが情報財を使用できなかった場合は、ユーザーは返品・返金を求めることができる可能性がある(民法第1条第2項)。

#### <Ⅱ> 具体的な重要事項の内容

現時点では以下のものは重要事項に該当するのではないかと考えられる。

(重要事項に該当すると思われる事項)

- (1) OSとプラットフォームソフトの種類とバージョン(なお、OSまたはプラットフォームソフトのいずれか一つで足りる場合は、その一方。)
- (2) CPUの種類と演算速度
- (3) メインメモリの容量
- (4) ハードディスクの容量

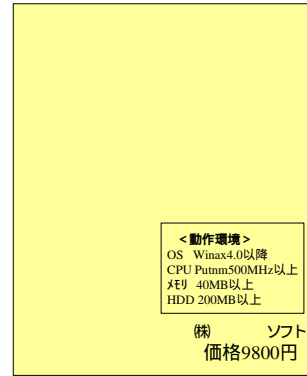
#### <Ⅲ> 情報提供の具体的方法

上記のような情報はベンダーしか知り得ないため、媒体型であれば外箱において、オンライン型であれば契約画面上において表示されることが多いと考えられる。

(提供されたと思われる例)

- ・パッケージソフトの外箱の金額表示の近辺などユーザーにとって気づきやすい位置に「動作環境」等の表示を付して枠で囲って明示した場合(右記例)

・  
・



## 【説明】

### 1. 問題の所在

情報財は、他の財と比較してその使用環境への依存度が高く、それを使用するに当たっての技術環境が異なると、全く作動しないケースもある。このため、例えば、ユーザーが店頭で代金を支払って、販売店からパッケージソフトウェアの引き渡しを受けたものの、それが使用できる動作環境の情報を提供されていなかったため、実際にプログラムを使用できない、といったことが起こり得る。この場合、ユーザーが提供契約を解除して、パッケージソフトウェアを販売店に返品することは可能かが問題となる。

民法第1条第2項の信義則により、契約の締結に当たっては、契約の一方当事者に、相手方に対する一定の情報提供の義務が課されると解されることがあり、その義務を履行しなければ、相手方は契約を解除することができる可能性がある。

そこで、情報財取引における本法理の適用関係は、具体的にどうなるかが問題となる。

### 2. 契約締結段階における情報提供義務

契約当事者間の情報や専門的知識に大きな格差がある場合は、その締結過程において、信義則(民法第1条第2項)上、契約の締結に当たり重要である事項(以下「重要事項」という。)の情報提供の義務が課される場合があると解されている。

情報財については、OSやプラットフォームソフト等の動作環境が合致しなければ、ユーザーは情報財をそもそも使用することができない。したがって、情報財にとって動作環境の説明は、提供時の付随義務としてはあるが情報財が使用できるか否かを判断

する上での重要な情報（重要事項）となる場合があり、信義則上、提供契約又はライセンス契約の締結に当たって、最低限の動作環境が明示されることが必要となる場合があるものと解される。

### 3．情報提供義務違反の効果

信義則上このような情報提供義務が課されることを認めた従来 of 裁判例には、i)損害賠償責任を認めたもの、ii)契約解除を認めたもの、の2つのケースが存在する。

i)の裁判例は、金融商品の取引や、契約締結後に長い期間が経過していた場合であり、損害賠償によるトラブル解決が求められたケースであったと考えられる。

一方、ii)の裁判例はいずれも不動産取引のケースであって、契約締結前に売主が買主に周辺環境等の重要事項を提供することは、売買契約の締結に際しての当然の付随義務であり、これが売買契約を締結するか否かを決する上において重要な事柄である以上、当該義務違反をもって買主は売買契約の解除をなし得る、としたものである。

動作環境が契約締結時に提供されなかったために、情報財が使用できないようなケースについては、買主は ii)の契約を解除して、支払い済みの対価の返還を求めることが多いものと解される。

### 4．情報提供義務の内容

ユーザーが代金を支払ったにもかかわらず動作環境が明示されなかったため情報財を使用することができない場合は、提供契約やライセンス契約の解除という形でユーザーの保護が図られる可能性がある。

また、具体的に表示すべき動作環境の必須事項としては、実際にトラブルとなっている実態から整理すると、例えば、以下のような項目が必須項目として該当するものと考えられる。

- (1) OS 及びプラットフォームソフトの種類及びバージョン（なお、OS 又はプラットフォームソフトのいずれか一つで足りる場合はその一方。）
- (2) CPU の種類及び演算速度
- (3) メインメモリの容量
- (4) ハードディスクの容量

## 5 . 情報提供の具体的方法

上記のような情報はベンダーしか知り得ないため、媒体型であれば外箱において、オンライン型であれば契約画面上において表示されることが多いと考えられる。例えば、媒体型の場合においては、外箱の金額表示の近辺等ユーザーにとって気づきやすい位置に「動作環境」等の表示を付して枠で囲って明示したような場合は、情報が提供されたものと解される。ただし、販売店がベンダーから情報を受け取って、ユーザーへの引き渡し時に当該情報を提供してもよいことは言うまでもない。

### (3) 契約中の不当条項

#### 【論点】

ライセンス契約の条項中、不当なものとして無効と解されるようなものはどのようなものがあるか。

#### 【考え方】

以下のような契約条項は無効となる可能性がある。無効である場合は、ユーザーは当該条項に拘束されない。

#### <I> 公序良俗に反する契約条項

民法第 90 条において規定する公序良俗に違反する条項については、無効となる可能性がある。

(不当条項に該当する可能性がある条項例)

- ・ベンダーの契約解除条件を著しく有利とする条項
- ・ベンダーが支払う損害賠償額を著しく低く定める条項
- ・

#### <II> 消費者契約法に違反する契約条項

消費者契約の場合、消費者契約法第 8 条～第 10 条に基づき、下記の事項等は無効となる可能性がある。

- ・ベンダーの全部免責条項
- ・ベンダーの故意または重過失の免責条項
- ・消費者が支払う損害賠償または違約金の額を、事業者の損害に比して不当に高く定める条項
- ・消費者の利益を一方的に害する条項

(不当条項に該当する可能性がある条項例)

- ・バグについて一切責任を負わないという条項
- ・バグの修補は全て有料という条項
- ・担保責任期間を著しく短くする条項
- ・

#### <III> 競争制限的な契約条項

独占禁止法上違法となる契約条項については、民法第 90 条（公序良俗違

反)により私法上の効力も無効となる場合もある。

(不当条項に該当する可能性がある条項例)

- ・ 試験研究を制限することにより、市場における公正な競争を阻害するおそれがある条項
- ・ 他の特定製品や競合製品の使用を禁止することにより、市場における公正な競争を阻害するおそれがある条項
- ・ リバースエンジニアリングを禁止することにより、市場における公正な競争を阻害するおそれがある条項
- ・

#### <IV> 著作権法上の権利制限規定がある部分についてユーザーの利用制限を課している契約条項

著作権法第 30 条から第 49 条の規定は、法律で著作権を部分的に制限している(すなわちユーザーに対してその部分の利用を認めている)規定であるが、これらの規定は基本的には任意規定であり、契約で制限することが可能であるとの解釈がある。しかしながら、ユーザーに対してそれらの規定よりも利用を制限しているライセンス契約の条項は無効であるとの解釈も存在している。

(著作権法上の権利制限規定がある部分についてユーザーの利用制限を課している契約条項は無効であるとの解釈をとった場合、不当条項に該当する可能性がある条項例)

- ・ 私的複製やバックアップコピーを完全に禁止する条項
- ・
- ・

#### 【説明】

ライセンス契約において、以下のような契約条項は無効となる可能性があると考えられる。

##### 1. 民法第 90 条において規定する公序良俗に反する契約条項

民法第 90 条は「公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反スル事項ヲ目的トスル法律行為ハ無効トスル」と規定している。これは、契約の効力を認めることが社会的に見て余りに妥当性を欠くときは契約を無効にするという考え方である。例えば、航空機事故に対する賠償金の額を 100 万円に制限した約款が公序良俗違反で無効とされた裁判例(大阪地裁昭和 42 年 6 月 12 日判決・下民集 18 巻 5・6 号 641 頁)があり、ライセンス契約の内容の不当性についても、同様の理が適用される可能性がある。

例えば、ベンダーの契約解除条件を著しく有利とする条項や、ベンダーが支払う損害賠償額を著しく低く定める条項は、上記により無効となる可能性がある。

## 2．消費者契約法に違反する契約条項

消費者契約の場合、消費者契約法第 8 条ないし第 10 条に基づき、下記の事項は無効となる可能性がある。

- ・ ベンダーの全部免責条項
- ・ ベンダーの故意又は重過失の免責条項
- ・ 消費者が支払う損害賠償又は違約金の額を、事業者の損害に比して不当に高く定める条項
- ・ 消費者の利益を一方的に害する条項

例えば、消費者契約において、バグについて一切責任を負わないという条項や、担保責任期間を著しく短くする条項は、上記により無効となる可能性がある。

## 3．競争制限的な契約条項

私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（以下「独占禁止法」という。）上違法となる契約条項については、民法第 90 条（公序良俗違反）に基づき、私法上の効力も無効となる場合もある。

例えば、試験研究を制限する条項や、他の特定製品や競合製品の使用を禁止する条項、リバーエンジニアリングを禁止する条項は、市場における公正な競争を阻害するおそれがある場合においては、上記により無効となる可能性がある。

## 4．著作権法上の権利制限部分についてユーザーの利用を制限する契約条項

情報財が著作権法で保護されている場合、同法の規定により著作権が制限されている部分（著作権法第 30 条ないし第 49 条）が存在する。この部分は著作権法によってユーザーに著作物の利用が認められているものであるが、基本的には任意規定であり、契約で利用を制限することが可能であるとの解釈がある。しかしながら、上記規定について情報財の利用を制限するようなライセンス契約の条項は無効であるとの解釈も存在している。この解釈によれば、例えば、私的複製やバックアップコピーを完全に禁止する条項が、上記により無効となる可能性がある。

#### (4) 契約終了時におけるユーザーが負う義務の内容

##### 【論点】

ライセンス契約の解除等により、ライセンス契約が終了した場合には、ユーザーは具体的にどのような義務を負うのか。

(例) ユーザーがライセンス契約を解除した後も、ユーザーは情報財を手元に残しておいても何ら責任を問われないのか。

##### 【考え方】

##### <Ⅰ> ライセンス契約解除のユーザーの義務（原状回復）

ライセンス契約解除に伴う原状回復義務として、ユーザーは情報財の使用を停止しなければならず、これを担保するために、ベンダーはユーザーに対して情報財を消去するよう求めることができると解するのが合理的である。

##### <Ⅱ> ライセンス契約不成立の場合等のユーザーの義務（不当利得返還義務）

ライセンス契約が不成立であった場合等の不当利得返還義務として、ユーザーは情報財を使用することができず、これを担保するために、ベンダーはユーザーに対して、情報財の消去を求めることができると解するのが合理的である。

##### <Ⅲ> ライセンス契約の満了時のユーザーの義務（契約による）

ライセンス契約満了時については、ユーザーの責任はその契約の内容に従ったものとなる。したがって、ユーザーは契約満了により情報財を使用することはできないが、ライセンス契約で規定されていなければ、情報財を消去する義務は負わない。

##### 【説明】

契約の終了時として、1．契約解除、2．契約不成立、3．契約期間の終了（満了）の3つに分けて検討する。



## 1. ライセンス契約解除に伴うユーザーの義務の内容

### (1) 問題の所在

契約が解除された場合は、民法第 545 条により、各当事者は相手方を原状に回復させる義務（以下「原状回復義務」という。）を負うとされている。この原状回復義務は不当利得の返還義務の性質を有し、その義務の範囲が原状回復まで拡大したものであり、その内容は原則として、解除をした債権者が既に有体物を給付していた場合はその返還であると解されている（性質上はじめから現物返還が不能な給付の場合にはその客観的な価格を金銭に見積もって返還することであると解されている。）。

したがって、情報財のライセンス契約を解除した場合、ユーザーは単に情報財の使用を停止するのみならず、ユーザーが複製した情報財についても、目的たる情報財の使用による利益として返還義務が生じるのではないかと考えられる。しかしながら、そもそも無体物である情報財は返還（占有移転）を觀念することができないとも考えられるため、民法第 545 条の原状回復義務の具体的内容が問題となる。

### (2) 原状回復義務の内容

ライセンス契約解除の場合、ユーザーは情報財を使用する権原がないので情報財の使用を停止しなければならないが、ユーザーの手元に情報財が残ったままであれば、ユーザーは契約解除後も正当な権原なく引き続き情報財を使用する可能性がある。

情報財のベンダーとして最も重要なことは、情報財の使用等を不可能とするために、当該情報財をユーザーの管理下からなくすことである。

したがって、ライセンス契約解除時の民法第 545 条の原状回復義務として、ユーザーは情報財の使用を停止しなくてはならず、これを担保するために、ベンダーはユーザーに対して、当該情報財を全て消去（削除）するよう求めることができると解するのが合理的である。

なお、著作権法第 47 条の 2 第 2 項は、「プログラムの複製物の所有者が当該複製物について所有権を有しなくなった後には、その者はその他の複製物を保存してはならない」と規定している。この規定において複製物の保存を認めないこととしているのは、ユーザーが複製物のいずれかを譲渡した場合も、残った複製物を使えることとなると、一旦複製物を手に入れれば何倍にも使用できることとなり、著作権者の利益を不当に害

することとなるためとされている。したがって、複製した情報財を消去するという考え方は著作権法における考え方にも合致する。

## 2．ライセンス契約不成立時等のユーザーの義務の内容

### (1)問題の所在

契約のために相手方に情報財が提供（送信）されたが、ライセンス契約が不成立であったり、無効となったときは、ユーザーは単に情報財を使用しないのみならず、ユーザーが複製した情報財についても、目的たる情報財による利得であるとして、民法第703条により、不当利得返還義務を負うのではないかと考えられる。

しかしながら、そもそも無体物である情報財は返還（占有移転）を觀念することができないとも考えられるため、民法第703条の不当利得返還義務の具体的内容が問題となる。

### (2)不当利得返還義務の内容

ユーザーが情報財を複製した場合、その複製コストはユーザーが負担しており、ベンダーには損失はないと考えられる可能性もある。

しかしながら、ユーザーの手元に複製した情報財が残ったままであれば、ユーザーは契約不成立にも関わらず正当な権原なく情報財を使用する可能性もあり、これはベンダーにとって損失となる危険性が極めて高い。また、当該損失がどの程度となるかを定量的に把握することは困難である。

情報財のベンダーとして最も重要なことは、情報財の使用等を不可能とするために、当該情報財をユーザーの管理下からなくすことである。

したがって、民法第703条の不当利得返還義務の内容として（仮に、民法第703条の不当利得返還義務そのものの内容に当たらない場合は、少なくとも同条を類推適用して）、ライセンス契約が成立しなかった場合、ユーザーは情報財を使用することができず、これを担保するために、ベンダーはユーザーに対して、当該情報財を全て消去（削除）するよう求めることができると解するのが合理的である。

## 3．ライセンス契約期間の終了（満了）時のユーザーの義務の内容

ライセンス契約期間の終了（満了）時については、ユーザーのライセンス契約終了時

の債務を契約内容として明示的に定めることが可能であるため、ユーザーの負う義務はその契約内容に従うこととなる。したがって、ユーザーは契約満了により情報財を使用することはできないが、ライセンス契約で規定されていなければ、情報財を消去する義務は負わない。

## (5) 契約終了の担保措置の効力

### 【論点】

情報財のライセンス契約が終了した後もユーザーが不当に情報財の使用を継続することを強制的に止めるために、ベンダーが技術的な使用制限手段を講じた場合に、ベンダーは何ら責任を問われないのか。

(例) プログラムについての使用期間限定のライセンス契約の契約期間満了時に、予めベンダーによって施されていた技術措置によってそのプログラムが突然止まってしまった。この場合、ベンダーは何ら責任を問われないのか。

### 【考え方】

#### <I> 原則

このような技術的な使用制限手段は、裁判所によらない強制履行手段となり、不法行為責任を構成する権利行使となる（自力救済禁止の原則に反する）可能性がある。

#### <II> 例外

しかし、少なくとも以下の3条件が揃っていれば、自力救済に当たらない可能性が高い。

i) ベンダーとユーザーの間にそのような技術的制限手段が行われることについて事前に合意があること

(該当すると思われる例)

- ・ライセンス契約において明示されており、ユーザーもこれに対して合意していること
- ・
- ・

ii) それが情報財の使用の継続を停止する範囲にとどまる技術的制限であること

(該当すると思われる例)

- ・事前に警告を与えた上で、当該情報財が動作しなくなるという制限
- ・
- ・

(該当しないと思われる例)

- ・当該情報財によって作成されたファイルを破壊するもの
- ・コンピュータのシステムに異常を来すようなもの
- ・

### iii) 当該技術的制限手段が事前に施されたものであること

(該当しないと思われる例)

- ・メンテナンスの際に人為的に操作を加える方法
- ・インターネット等のネットワークを通じて当該情報財に作用する信号を送ることにより操作を加える方法
- ・

## 【説明】

### 1. 問題の所在

情報財のライセンス契約において、契約期間が終了した後もユーザーが対価を支払わず不当に情報財の使用を継続するという問題がある。そのためベンダーが、その使用を強制的に止めるための技術的制限手段、例えばユーザーが情報財を使用できなくしたり、消滅させたりする手段を情報財に施す場合がある。

民法第414条第1項は、債務者が任意に債務の履行を行わないときは、債権者は強制履行を裁判所に請求できると規定しており、その反対解釈から、債権者が自力で債務者に対して履行を強制することは認められていない（自力救済の禁止の原則）。すなわち、権利者が自らの権利（請求権）を私力（自力）により実現することは原則として禁止されており、民法上規定はないものの通説・判例ともに原則に違反した権利行使は不法行為を構成するとしている。

したがって、情報財のライセンス契約の終了等を担保するにあたって、ベンダーが技術的制限手段を用いることは自力による救済としてこの原則に反するか否かが問題となる。

### 2. 判断基準

#### (1) 事前合意があること

ベンダーがユーザーから、情報財を使用不能とすることについて事前に合意を得ている場合については、自力救済禁止の原則はそもそも問題とならないと考える余地がある。

しかしながら、所有権留保の特約が付された売買契約においては、債務不履行があった場合には売主が自力で目的物を搬出することができ買主はこれに異議を述べない旨の特約（いわゆる取戻約款）が置かれることが多いが、このような合意があることだけをもって自力救済が認められることとはならないというのが通説である。また、ある裁判例（福島地裁昭和 47 年 2 月 24 日判決・判例タイムズ 278 号 201 頁）は、いわゆる取戻約款があった場合で、代金不払いによって取戻行為が行われた事案について、自力救済禁止の原則との関係で当該約款が民法第 90 条により無効となる可能性がある旨指摘している。

したがって、技術的制限手段の存在についての事前の合意は、そのみでは、自力救済禁止の原則との関係でその効力が否定される可能性がある。

#### (2) 使用の継続を停止する（終了を担保する）範囲にとどまる技術的制限手段であること

使用の終了を超えた技術的制限手段についてもライセンス契約において事前に合意することは考えられる。しかしながら、取引対象である情報財を超えた制限の発動（例えば、ハードディスクにおける当該情報財以外の情報（当該情報財によって作成されたファイル等）の消去や、コンピュータのシステムに異常を来すようなもの等）を条件として、使用料の支払といった債務の履行を要求することは、契約締結時の両当事者の交渉力の差等を考慮すれば、ユーザーへの不当な制限と考えられて合意が無効と解される場合もあり得る。

#### (3) 事前に施された技術的制限手段であること

また、予め技術的制限手段を情報財に施すことなく、事後的に施す（例えば、メンテナンスの際にユーザーのコンピューターシステムを人為的に操作して当該情報財を一定期間経過後に使用不可能にする、インターネット等のネットワークを通じて当該情報財に作用して使用不可能にするような特定の信号を送信する等）ことも、事前の合意を根拠に行われ得るが、これは、ベンダーが恣意的に利用する危険性が高いことから、事前の合意があったとしても、その態様から権利濫用として評価される場合もあり得る。

## 4. まとめ

以上をまとめれば、技術的制限手段については、(1)そのような技術的制限手段が行われることについて事前の合意があり、(2)使用の継続を停止する(終了を担保する)範囲にとどまる技術的制限であって、(3)当該技術的制限手段が事前に施されたものである場合には、当該技術的制限手段を施すことは自力救済に当たらず合法であると判断される可能性が高いと解される。

## (6) ベンダーが負うプログラムの担保責任

### 【論点】

プログラムにいわゆる「バグ」があったため、動作上の不具合が発生した時に、ベンダーはユーザーに対していかなる責任を負うのか。

(例) ライセンス契約においてプログラムの担保期間(例: 引き渡しから××日以内)が設定されていることがあるが、期間経過後に瑕疵に該当するバグを発見したとき、ベンダーの責任を問うことは可能か。

### 【考え方】

#### <I> 責任を問えるバグ(瑕疵に該当するバグ)とはどのようなものか

i) 取引の通念に照らし合理的に期待される通常有すべき機能・品質をプログラムが有していない場合であって、かつ ii) 通常予見可能な使用環境・使用方法の範囲内で動作上の不具合が発生した場合、そのプログラムのバグは瑕疵に該当するものと解され、ベンダーの責任を問うことができる。

#### i) 取引の通念に照らし合理的に期待される通常有すべき機能・品質を有していない場合

(該当すると思われる例) ・プログラムが全く動かない場合 ・ ・
(該当しないと思われる例) ・ワープロソフトで罫線と網掛けと回転と2倍角を組み合わせようとしたが、意図した結果とならなかったような場合 ・ ・

#### ii) 通常予見可能な使用環境・使用方法の範囲内で発生した場合

(該当しないと思われる例) ・外箱において明示された動作環境を満たさない使用環境下で発生した不具合 ・プログラムコードにユーザーが手を加えた結果発生した不具合 ・
--

#### <II> バグが瑕疵に該当する場合、ベンダーに対してどのような責任を問えるか



プログラムという財の特殊性から、原則として、ユーザーはベンダーに対して、まずは i) 瑕疵に該当するバグの修補請求または代物の請求が可能となり、これに対して、遅滞なく修補されない場合または代物が提供されない場合は、ii) 損害賠償の請求または契約解除が可能となる。

### <III> 瑕疵に該当するバグについてベンダーの責任を問える期間

ライセンス契約中に瑕疵に該当するバグについて、ベンダーの担保責任期間を短くする特約がある場合、その効力が問題となる。

#### i) ユーザーが消費者である場合

消費者契約法第 10 条においては、消費者に対して著しく不利益となる条項は無効と規定されており、例えば瑕疵に該当するバグについて、ベンダーの担保責任期間を著しく短くする条項等は無効と解される可能性がある。

(消費者契約法に違反するとして無効と解される可能性がある例)

- ・プログラムの担保責任期間を著しく短期間とする条項
- ・
- ・

なお、無効となった場合や特約がない場合は民法の考え方が適用され、ア) 瑕疵に該当するバグを発見したときから 1 年またはイ) 引き渡しを受けたときから 5 年のいずれかでベンダーに対して責任を問うことが可能となる。(瑕疵担保責任(民法第 570 条等)が問われる場合は瑕疵を発見したときから 1 年(民法第 566 条)。債務不履行(民法第 415 条等)が問われる場合は引き渡しから 10 年(民法第 167 条第 1 項)であるが、通常はベンダーは事業者であるので商法の規定が適用され引き渡しから 5 年(商法第 522 条)となる。)

#### ii) ユーザーが消費者でない場合

消費者契約法は適用されないので、原則として、特約に従う。特約がない場合は、民法の考え方が適用され、ア) 瑕疵に該当するバグを発見したときから 1 年またはイ) 引き渡しを受けたときから 5 年のいずれかでベンダーに対して責任を問うことが可能となる。

(公序良俗に違反するなどとして特約が無効と解される可能性がある例)

・  
・  
・

## 【説明】

### 1. 問題の所在

情報財の中でもプログラムについては、プログラム上の誤り(以下「バグ」という。)により、コンピュータの情報処理動作が通常の意図と異なる動作をするような不具合が発生する場合があります、そのためユーザーがプログラムを十分に使用できないという問題が生じることがある。

この問題に対しては、

ア) 瑕疵担保責任(民法第 559 条で準用される民法第 570 条で準用される民法第 566 条) ... 瑕疵を知ってから 1 年請求可能

イ) 債務不履行責任(民法第 415 条(債務不履行による損害賠償、完全履行請求)、民法第 541 条(債務の履行遅滞による解除)、民法第 543 条(債務の履行不能による解除)) ... 引き渡しから 10 年請求可能

のいずれかの規定の適用が問題となる。

そこで、これらの適用において、i) a)プログラムのバグについて、どのような場合にベンダーが責任を負うこととなり、 b)その場合に、ベンダーが責任を負うべき期間はどうか、が問題となる。また、ii)ライセンス契約中のこれらの責任を免責する特約は有効なのか、も問題となる。

### 2. プログラムの瑕疵

#### (1)プログラムの瑕疵の有無を判断する際の考慮要素

目的物たるプログラムが、取引の通念に照らし合理的に期待される通常有すべき機能・品質を有していない場合は、原則として、瑕疵に該当すると判断される。

しかしながら、市場に流通するプログラムは不特定多数のユーザーに使用させることを目的として提供されているものであり、ユーザーがプログラムを使用する環境(以下「使用環境」という。)は様々であるため、予めその全てに対応するプログラムを作成することは現実的には困難である。したがって、プログラムの使用に当たっては、その使用環境に応じた不具合が発生することは避けられず、全ての不具合について常にベン

ダーの責任（プログラムの瑕疵）を認めることはあまりに酷と考えられる。

具体的には、プログラムの動作は、プログラムの使用環境に依存するため、通常プログラムの動作環境が予め明示されていることが多いが、この場合において、ユーザーの使用環境が明示された動作環境の範囲外のときに発生したプログラムの不具合は、ベンダーに責任があるとは判断されないものと解される。

また、ユーザーは、通常、プログラムのマニュアル、ヘルプ機能等によって、当該プログラムの使用方法を合理的に判断することができる。したがって、通常予見し得る使用方法の範囲外で発生した不具合（例えば、プログラムコードにユーザーが手を加えた結果発生した不具合）についても、ベンダーに責任があるとは判断されないものと解される。

以上から、取引の通念に照らし合理的に期待される通常有すべき機能・品質をプログラムが有していない場合であって、かつ通常予見可能な使用環境・使用方法の範囲内で動作上の不具合が発生した場合は、そのバグは瑕疵に該当すると判断される。したがって、いわゆるプログラムのバグ一般が瑕疵に該当するわけではなく、ユーザーの使用に差し支えない程度の微細なバグはそもそも瑕疵とまではいえない（ベンダーの責任は問われない）と解される。

## (2)ベンダーの責任の内容

### i) 考え方

有体物である通常の物品は、大多数の正常品の一部に瑕疵ある不良品が存在することが通常であるのに対し、市場で流通するプログラムは、各ユーザーに引き渡された全てのプログラムが全く同じであり、一つのバグが存在した場合は、全てのユーザーが使用するプログラムにおいて同じバグが存在することとなる。

他方、一つ一つの物品を個別に修理する必要のある有体物と異なり、ベンダーは容易に修正プログラム又は瑕疵のない正常なプログラムを提供することが可能であり、各ユーザーはこれにより容易にプログラムの修正を行うことができる。仮にプログラムの動作上の不具合を引き起こすバグが重大なものであっても、ベンダーによる簡易な修補によってそれが解消される可能性もある。

このように瑕疵が発生し易いが、修補も容易であるといったプログラムという財の特

殊性に鑑みれば、プログラムの瑕疵に対しては、信義則上原則としてユーザーは、まずはベンダーにとっても負担が少ないと考えられるプログラムの修補又は代物の提供を請求すべきであると考えるのが相当である（ただし、余りにも重大な瑕疵があるケースについては、直接損害賠償や契約解除を求めることが可能な場合もあると考えられる。）。

なお、プログラムにはバグが存在することがあり得るものであるから、バグが瑕疵に該当する旨の指摘を受けた後、遅滞なく補修を終え、又はユーザーと協議の上相当と認める代替措置を講じたときは、ベンダーは損害賠償等の責任を負わない、とする裁判例（東京地裁平成9年2月18日判決・判例タイムズ964号172頁）もある。

これは、特定の動作環境下でのみ動くことが要求されている開発委託契約で作成したカスタムメイド型のプログラムに関するものであるが、不特定多数のユーザーに使用させることを目的として提供されている市場流通型のプログラムについては、ユーザーの使用環境が様々であり、その全てに対応するプログラムを作成することはさらに困難であることに鑑みれば、少なくともカスタムメイド型のプログラムと同様の基準が適用され、ユーザーの指摘に応じて、遅滞なく修補したり、代替的な措置を提供した場合には、ユーザーは、ベンダーに対して損害賠償等の責任を問うことはできないものと解される。

## ii) 民法の条文の適用

ユーザーから対価を受け取りながら、瑕疵のあるプログラムを提供した場合は、その責任はベンダーに帰することとなり、民法上の責任としては、ア) 瑕疵担保責任（民法第570条）又はイ) 債務不履行責任（民法第415条）のいずれかが問われることになる。

### ア) 瑕疵担保責任が適用される場合

ユーザーはベンダーに対して、a) 契約解除、b) 損害賠償のいずれかを請求することが考えられる。

しかしながら、a)については「契約ヲ為シタル目的ヲ達スルコト能ハザル場合」に適用が限られているところ、プログラムは修補することによって、本来の機能、すなわち契約の目的を果たすことが可能となるため、ユーザーがプログラムの修補又は代物の提供を請求し、これに対してプログラムの修補又は代物の提供がなされた場合は、「契約の目的が達せられた場合」に該当し、解除することはできないと解

される。

また、b)についても、容易に修補可能というプログラムの財としての特殊性を考慮すれば、前述したように損害賠償を求めるよりも、信義則上まずはベンダーにとっても負担が少ないと考えられる修補又は代物の提供を求めるべきであり、それがプログラムの取引に関する契約当事者の意思にも合致していると考えられる。

#### イ) 債務不履行責任が適用される場合

契約の目的たるプログラムの機能が発揮されていないという瑕疵がある場合は、ベンダーの債務不履行に当たると判断されることとなる。したがって、ユーザーはベンダーに対して、a)契約解除、b)損害賠償、c)完全履行のいずれかを求めることが考えられる。

##### a) 契約解除

民法第 541 条又は第 543 条においては、相当の期間を定めて履行を催告し、その期間内に履行されなかった場合、又は履行が不能となったときに契約を解除することができる。したがって、ベンダーに対し、相当の期間を定めて履行を催告し、これに対してベンダーからその期間内にプログラムの修補又は代物の提供がなされた場合は、契約を解除することはできないと解される。

##### b) 損害賠償

民法第 415 条においては、債務の本旨たる履行ができない場合は損害賠償を請求することができ、履行が遅滞した場合にも、ユーザーに損害があれば損害賠償を請求することができる。しかし、容易に修補可能というプログラムの財としての特殊性を考慮すれば、前述したように損害賠償を求めるよりも、信義則上まずはベンダーにとっても負担が少ないと考えられる修補又は代物の提供を求めるべきであり、それがプログラムの取引に関する契約当事者の意思にも合致していると考えられる。

##### c) 完全履行

民法第 415 条から、修補請求又は代物請求が可能と解される。

以上から、バグがプログラムの瑕疵に該当する場合であっても、遅滞なく修補されたり、代物が提供された場合は、ベンダーはそれ以上の責任を問われないものと解さ

れる。

また、ユーザーは、原則として、まずはベンダーに対してプログラムの修補又は代物の請求を行い、遅滞なくプログラムが修補されない場合又は代物が提供されない場合に、ベンダーに対して損害賠償の請求又は契約解除を行うことが可能となると解される。

なお、このように解されるのは修補又は代物の提供が、通常、ベンダーにとっても負担が少ないと考えられることによるのであるから、当該プログラムのサポートが既に終了している場合など、ベンダーとしては修補や代物提供に応じることが困難なときには、損害賠償や契約解除による解決が相当となろう。

### 3．ベンダーの担保責任等が問われる期間

瑕疵担保責任を問うことのできる期間は、ユーザーが瑕疵を知ったときから1年である（民法第570条，第566条）。

また、債務不履行責任は、プログラムの引き渡しを受けてから10年で時効により消滅する（民法第167条第1項）。ただし、通常、ベンダーは事業者であるため、商法第522条により5年で時効により消滅する。

なお、商品の流通期間が非常に短い財であるプログラムについて、このような期間が適切か否かについては、別途検討が必要ではないかと考えられる。

### 4．ライセンス契約中に瑕疵担保責任又は債務不履行責任に関する免責特約がある場合の扱い

#### (1)ユーザーが消費者である場合

ライセンス契約に、ベンダーの瑕疵担保責任又は債務不履行責任を免責する特約が置かれることがあるが、消費者契約の場合、下記のような特約については、消費者契約法第8条第1項第1号，第2号，第5号又は第10条に該当し、無効と解される可能性がある。

- ・事業者の債務不履行により消費者に生じた損害を賠償する責任の全部を免除する条項
- ・事業者の故意又は重過失による債務不履行により消費者に生じた損害を賠償する責任の一部を免除する条項

- ・ 目的物に隠れた瑕疵があるときに、当該瑕疵により消費者に生じた損害を賠償する事業者の責任の全部を免除する条項
- ・ 消費者の利益を一方向的に害する条項

例えば、バグに対して一切責任を負わないという条項や、バグに関する修補は全て有償とする条項は、消費者契約法第 8 条により無効と解される可能性があり、また、ベンダーのプログラムの担保責任期間をプログラムの特性等から判断される合理的な期間に比して不当に短くする条項も、消費者契約法第 10 条により無効と解される可能性がある。

## (2)ユーザーが消費者でない場合

一方、ユーザーが消費者でない場合は、消費者契約法は適用されないため、原則として、特約に従うこととなる。

## (7) ユーザーの知的財産権譲受人への対抗

### 【論点】

ユーザー（ライセンシ）は、ベンダー（ライセンサ）から契約で情報財の使用を許諾されているだけであるが、当該情報財に関する知的財産権を譲り受けた者に対して、引き続き当該情報財の使用を主張できるか。

### （例）

1. 情報財に関する知的財産権が第三者に譲渡された場合、ライセンス契約に基づき当該情報財を使用していたユーザー（ライセンシ）は情報財の使用を続けることができるか。
2. ベンダー（ライセンサ）が倒産した場合、ライセンス契約に基づき当該情報財を使用していたユーザー（ライセンシ）は情報財の使用を続けることができるか。

### 【考え方】

#### <Ⅰ> 情報財に関する知的財産権が第三者に譲渡された場合

##### i) 情報財のライセンサとしての地位を移転する場合

知的財産権の譲渡人と譲受人の間の契約をもってなすことができるものと解される可能性があり、その場合、ユーザー（ライセンシ）は引き続き当該情報財を使用することができる。

##### ii) 知的財産権のみが譲渡された場合

###### a) 著作権が譲渡された場合

情報財を単に使用することは著作物の利用ではないので、譲受人の著作権を侵害しない限り、ユーザー（ライセンシ）は情報財の使用を継続することができる。

###### b) 特許権が譲渡された場合

当該特許権の通常実施権の登録を行っている場合などを除き、譲受人の



特許権を侵害するため、情報財の使用を継続できない。ただし、ユーザーが消費者である場合は、通常は特許権侵害に該当せず、情報財の使用の継続が可能である。

## <II> ベンダー（ライセンサ）が倒産した場合

管財人によってライセンス契約が解除される可能性があり、その場合、ユーザー（ライセンシ）は情報財の使用を継続することができなくなる。

もっとも、例えば一般的なパッケージソフトウェアのように最初に対価を支払えばそれ以降使用の対価を支払う必要のないような情報財のライセンス契約については、通常は解除の対象とされることはない。

### 【説明】

#### 1．問題の所在

ユーザー（ライセンシ）は、ベンダー（ライセンサ）から契約で情報財の使用を許諾されているだけであり、ベンダー（ライセンサ）から情報財に関する知的財産権を譲り受けた第三者に対抗できず、情報財を突然使用できなくなるおそれがあるのではないかと指摘がある。また、ベンダー（ライセンサ）が破産した場合、破産管財人が破産者の契約を一方的に解除することができる場合がある（破産法第 59 条第 1 項。同様の規定として、会社更生法第 103 条第 1 項、民事再生法第 49 条第 1 項。）ことから、この場合においてもユーザー（ライセンシ）は、情報財を突然使用できなくなるおそれがあるのではないかと指摘がある。

#### 2．知的財産権が第三者に譲渡された場合

ベンダー（ライセンサ）が情報財に関する知的財産権を譲渡する場合、その具体的内容としては、(1)当該情報財のライセンサとしての地位を移転する場合と、(2)知的財産権のみを譲渡する場合とがある。

##### (1) 当該情報財のライセンサとしての地位を移転する場合

契約上の地位の移転は、債権譲渡と債務引受が一体となったものであることから、原則として、譲渡人及び譲受人の合意のみならず、契約の相手方の同意を得ることが必要である。

しかしながら、土地の所有権とともに、当該土地の賃貸借契約における賃貸人たる地位を譲渡した場合について、賃貸人の義務は賃貸人が何人であるかによってその履行方法が特に異なるものではなく、また、土地所有権の移転があったときに新所有者にその義務の承継を認めることがむしろ賃借人にとって有利であることから、特段の事情のある場合を除き、新所有者が旧所有者の賃貸人としての権利義務を承継するには、賃借人の承諾を必要とせず、旧所有者と新所有者間の契約をもってこれをなすことができるものと解されている（最高裁昭和 46 年 4 月 23 日第二小法廷判決・民集 25 卷 3 号 388 頁）。

本判例の趣旨に照らすと、ベンダー（ライセンサ）の債務もユーザー（ライセンシ）に対して情報財を使用させるというものであり、ライセンサが何人であるかによってその履行方法が特に異なるものではない場合があると考えられ、また、知的財産権の移転があったときに当該権利の譲受人にその義務の承継を認めることがむしろユーザー（ライセンシ）にとって有利であることから、ライセンサとしての地位の譲渡についても知的財産権の譲渡人と譲受人間の契約をもってなすことができるものと解される可能性がある。この場合、ユーザー（ライセンシ）は、新ライセンサに対して、引き続き情報財の使用を主張することができる。

なお、この場合、仮に年度ごとにライセンス料が支払われるようなときには、i)三者間で譲渡契約を締結する、ii)旧ライセンサからユーザー（ライセンシ）に対して、ライセンス料債権を新ライセンサに譲渡した旨の通知をする、iii)ライセンス料債権の譲渡についてユーザー（ライセンシ）が旧ライセンサ又は新ライセンサに承諾するのいずれかによって、新ライセンサは、次年度以降のライセンス料の支払を受けることができる（民法第 467 条第 1 項）。

## (2) 知的財産権のみを譲渡する場合

この場合、情報財に関する知的財産権の譲受人は知的財産権侵害を主張することによって、ユーザー（ライセンシ）による当該情報財の使用を認めないことが考えられる。知的財産権が著作権の場合と特許権の場合に分けて検討する。

### i) 著作権の場合

著作権で保護された情報財を単に使用することは著作権法上保護されている著作物の利用には該当しないので、別途譲受人の著作権を侵害しない限り、ユーザー（ライ

センシ)は情報財の使用を継続することができると解される。

もっとも、単なる使用以外の行為、例えば情報財の私的使用以外の複製や情報財の修正(改変、翻案)等は、著作権侵害に該当する可能性が高い。

なお、著作権法上、ライセンスの権利に第三者対抗力を認める制度は存在していない。

## ii) 特許権の場合

特許権で保護された情報財を使用することは特許権の実施行為に該当し(特許法第2条第3項第1号)、譲受人の特許権を侵害するので、ユーザー(ライセンス)は情報財の使用を継続することができないと解される。もっとも、その使用が業としての使用とは解されない場合は、特許権侵害行為に該当せず、使用を継続することができる(特許法第68条)。

また、特許権の通常実施権の登録を行っている場合は第三者への対抗力が認められている(特許法第99条第1項)ので、ユーザー(ライセンス)による情報財の使用が業としての使用にあたる場合であっても、当該情報財に関する全ての特許権の通常実施権の登録がなされている場合であれば、ユーザー(ライセンス)は情報財の使用を継続することができる。

なお、i)、ii)いずれの場合も、第三者に知的財産権が譲渡された結果、当該情報財の使用が継続できなくなったユーザー(ライセンス)は、ベンダー(ライセンサ)に対して損害賠償を請求することができる。

## 3. ベンダー(ライセンサ)が倒産した場合

倒産法制上、双務契約について、契約当事者がともに債務の履行を完了していないときは、管財人は契約を解除するか契約に基づく履行の請求をするか選択できるとされている(破産法第59条第1項、会社更生法第103条第1項、民事再生法第49条第1項)。

そのため、ベンダー(ライセンサ)の倒産に伴い、管財人によってライセンス契約が解除される可能性がある。ここで解除が選択された場合は、管財人又は管財人から権利を譲り受けた第三者(譲受人)と改めてライセンス契約を締結しない限り、ユーザー(ライセンス)は情報財の使用を継続することができなくなる。

もっとも、解除の対象となる双務契約はともに債務の履行を完了していないものであり、例えば一般的なパッケージソフトウェアのように最初に対価を支払えばそれ以降使用の対価を支払う必要のないような情報財のライセンス契約の場合については、解除の対象とされることはないと解される。

## 2 . 知的財産

### (1) PtoP ファイル交換ソフト

#### 【論点】

PtoP ファイル交換ソフトを用いて、音楽などのファイルを無断でインターネット上へアップロードする行為やインターネット上からダウンロードする行為は著作権法違反となるか。

#### 【考え方】

PtoP ファイル交換ソフトには、i)ファイルをインターネット上へ送信可能とする、いわゆるアップロード行為と、ii)ファイルをインターネット上からユーザー手元の媒体へ複製する、いわゆるダウンロード行為の2つの機能がある。

#### i) アップロード行為

音楽などのファイルを権利者の許諾を得ずにインターネット上へアップロードする行為は、著作権法上の公衆送信権または送信可能化権の侵害、すなわち、著作権または著作隣接権の侵害に当たる。

#### ii) ダウンロード行為

音楽などのファイルをインターネット上からダウンロードする行為は、私的複製に相当する限り、著作権または著作隣接権の侵害とはならない。

#### 【説明】

##### 1 . 問題の所在

近年、ナップスターやグヌーテラと呼ばれるインターネット上でのユーザー同士による音楽等のファイルの交換を支援するソフトウェア（以下「PtoP ファイル交換ソフト」という。）が出現し、著作権者及び著作隣接権者の利益が損なわれるおそれが生じてきている。PtoP ファイル交換ソフトには、ファイルをインターネット上へ送信可能とする、いわゆるアップロード行為と、ファイルをインターネット上からユーザーの手

元の媒体へ複製する、いわゆるダウンロード行為の二つの機能がある。

著作権法には公衆送信権及び送信可能化権（著作権法第 23 条、第 92 条の 2、第 96 条の 2）等の規定が存在するが、PtoP ファイル交換ソフトの使用がこれらに当たるかどうか問題となる。

## 2．アップロード行為

著作権法上、音楽等のファイルをインターネット上で送信可能とする行為（アップロード行為）は、同法第 2 条第 1 項第 9 号の 5 に規定されている「送信可能化」行為に該当する。また、「送信可能化」を行う権利は、著作権者及び著作隣接権者によって専有されている（同法第 23 条、第 92 条の 2、第 96 条の 2）。

したがって、故意又は過失によって権利者の許諾を得ずに PtoP ファイル交換ソフトを用いて音楽等のファイルをインターネット上で送信可能にした者は、公衆送信権又は送信可能化権（同法第 23 条、第 92 条の 2、第 96 条の 2）を侵害しており、損害賠償責任を負うと解される（民法第 709 条）。また、故意過失の有無に関わらず権利侵害があった場合又は侵害のおそれがある場合には権利者から差止請求を受けることもあり（著作権法第 112 条）、さらに、刑事責任として 3 年以下の懲役又は 300 万円以下の罰金を課されることがある（同法第 119 条）。

## 3．ダウンロード行為

他方、PtoP ファイル交換ソフトを用いて権利者によって許諾されていない音楽等のファイルを他のユーザーからインターネット経由で受信し複製する行為（ダウンロード行為）は、技術的保護手段の回避等によって行ったものではなく、かつ個人的に又は家庭内その他これに準ずる限られた範囲内において使用する限り、私的複製に相当し、著作権又は著作隣接権の侵害には当たらないものと解される（同法第 30 条第 1 項、第 102 条第 1 項）。

ただし、受信した複製物を私的使用の目的以外に使用する場合は複製権（同法第 21 条、第 96 条、第 98 条、第 100 条の 2）の侵害となり（同法第 49 条第 1 項第 1 号、第 102 条第 4 項）、損害賠償責任（民法第 709 条）、権利者からの差止請求（著作権法第 112 条）、刑事責任（同法第 119 条）の問題が生じる可能性がある。

なお、例えば、ダウンロードしたファイルがそのままインターネット上で送信可能と

なる（ダウンロード行為が同時にアップロード行為に相当する）場合は、当該アップロード行為が公衆送信権又は送信可能化権の侵害となるとともに、当該ダウンロード行為も私的使用のための複製には該当しないため複製権侵害に該当すると解される。

## (2) ドメイン名の不正取得等

### 【論点】

不正競争防止法第2条第1項第12号において、ドメイン名の不正取得等の行為が「不正競争」として規定されているが、どのような行為が本号の「不正競争」に該当するのか。

### 【考え方】

#### <Ⅰ> 不正競争防止法における不正競争の定義と対象

不正競争防止法第2条第1項第12号において、i)不正の利益を得る目的（図利目的）または他人に損害を加える目的（加害目的）で、ii)他人の特定商品等表示と同一または類似の、iii)ドメイン名を使用する権利を取得し、もしくは保有しまたはそのドメイン名を使用する行為を「不正競争」としている。

また、末尾が.jpであるJPドメイン名と末尾が国コードでない一般ドメイン名（例：「.com」,「.org」等）のいずれも、不正競争防止法の対象となる。

#### <Ⅱ> 不正競争に該当するケース

これまでに裁判例や民間の紛争処理事例において、(1)ドメイン名の取得や使用が不正の目的等と認められたケースと(2)ドメイン名が他人の商品や商標等と同一または類似であると認められたケースについて以下に例示する。これらのようなケースは不正競争防止法上、不正競争に該当する可能性が高い。

##### i) これまでにドメイン名の取得や使用が不正の目的等と認められたケース

- ・ 著名な事業者の商標等と同一または類似のドメイン名を取得し、事業者の信用や顧客吸引力を利用し、商品販売を行うケース
- ・ 著名な事業者の商標等と同一または類似のドメイン名を取得、使用し、当該ウェブサイト上で事業者を誹謗・中傷する内容の表示を行い、信用毀損を図るケース
- ・ 著名な事業者の商標等と同一または類似のドメイン名を使用し、ポルノグラフィカルなウェブサイトを開設するケース
- ・ 著名な事業者の商標等と同一または類似のドメイン名を使用し、当該ドメイン名を自己のウェブサイトへの転送を目的として利用しているケース
- ・ 著名な事業者の商標等と同一または類似のドメイン名を取得し、事業者がウェブサイトを開設し事業を行うことの妨害を目的として、当該ドメイン名を保有し続けるケース



- ・ 著名な事業者の商標等と同一または類似のドメイン名を登録し、当該ドメイン名の移転について不当な対価を要求するなど、ドメイン名の転売が目的と考えられるケース
- ・
- ・

## ii) これまでに特定商品等表示等とドメイン名とが同一または類似であると認められたケース

- ・ 「jaccs.co.jp」と JACCS
- ・ 「j-phone.co.jp」と J-PHONE
- ・ 「sunkist.co.jp」と SUNKIST、Sunkist
- ・ 「sonybank.co.jp」と SONY
- ・ 「itoyokado.co.jp」と Ito Yokado
- ・
- ・

### <III> 不正競争防止法の効果

不正競争によって営業上の利益や信用を侵害された者は、i)ドメイン名の使用差止（不正競争防止法第3条）、ii)損害賠償（同法第4条、第5条）、iii)信用回復措置（同法第7条）を請求することができる。

### <IV> 紛争処理方針による取扱い

不正競争防止法による解決手続の他、それぞれのドメイン名について民間団体が策定した紛争処理方針に基づいた解決手段をとることも可能である。

#### i) JP ドメイン名についての取扱い

JP ドメイン名については、JPNIC の定める「JP ドメイン名紛争処理方針」に基づき JPNIC の認定紛争処理機関に紛争処理を求めることも可能である。申立人は登録者のドメイン名登録の取消請求または当該ドメイン名登録の申立人への移転請求が可能である。ただし、裁定結果に不服のある当事者は管轄裁判所へ出訴することが可能であり、最終決定ではない。

#### ii) 一般ドメイン名についての取扱い

一般ドメイン名については、ICANN の定める「統一ドメイン名紛争処理方針」に基づき ICANN の認定紛争処理機関へ紛争処理を求めることが可能である。申立人は登録者のドメイン名登録の取消請求または当該ドメイ

ン名登録の申立人への移転請求が可能である。ただし、裁定結果に不服のある当事者は管轄裁判所へ出訴することが可能であり、最終決定ではない。

## 【説明】

### 1．ドメイン名の不正取得等に関する不正競争防止法の規制

近年のインターネットの急速な普及に伴い、事業者にとっては、インターネットを通じた営業・広報等のビジネス活動の重要性が高まり、ドメイン名が高い価値を有するに至った。しかし、ドメイン名の登録は、原則として誰もが先着順に登録することができるため、第三者が有名企業や著名な商品の名称等と同一又は類似の文字・数字等の配列をドメイン名に登録した上で、商標権者等に対して不当に高い価格で買取りを請求したり、ウェブサイト上で商標権者等の信用を傷つけたりする等の行為が世界各国で頻発した。

そこで、不正競争防止法は、第2条第7項においてドメイン名を「インターネットにおいて、個々の電子計算機を識別するために割り当てられる番号、記号又は文字の組合せに対応する文字、番号、記号その他の符号又はこれらの結合」とする定義規定を設け、同法第2条第1項第12号において、(1)不正の利益を得る目的又は他人に損害を加える目的で、(2)他人の特定商品等表示と同一又は類似の、(3)ドメイン名を使用する権利を取得し、若しくは保有し又はそのドメイン名を使用する行為を「不正競争」として規制している。

なお、上記のドメイン名の定義から明らかなように、末尾が「.jp」となっている我が国の国コードドメイン名（以下「JP ドメイン名」という。）のみならず、諸外国の国コードドメイン名（例えば「.uk」、「.kr」、「.de」等）や末尾が国コードとなっていないドメイン名（以下「一般ドメイン名」という。例えば「.com」、「.net」、「.org」、「.info」等）についても、本法の対象となる。

### 2．どのような行為が「不正競争」に当たるか

#### (1) 不正の利益を得る目的又は他人に損害を加える目的（図利加害目的）

本法では主観的要件として、図利目的又は加害目的という二つの類型を規定している。前者は、公序良俗、信義則に反する形で自己又は他人の利益を不当に図る目的を、後者は、他者に対して財産上の損害、信用の失墜といった有形無形の損害を与える目的をそ

れぞれ指すものと解される。

なお、これまでの裁判例及び日本知的財産仲裁センターにおける紛争処理事例において、ドメイン名の登録・使用が不正の目的と認められたものには以下のようなケースがあり、これらの判示事項は、本法の図利加害目的の解釈にあたっては、参考になるものと考えられる。

- ・ 著名な事業者の商標等と同一又は類似のドメイン名を取得し、事業者の信用や顧客吸引力を利用し、商品販売を行うケース
- ・ 著名な事業者の商標等と同一又は類似のドメイン名を取得、使用し、当該ウェブサイト上で事業者を誹謗・中傷する内容の表示を行い、信用毀損を図るケース
- ・ 著名な事業者の商標等と同一又は類似のドメイン名を使用し、ポルノグラフィカルなウェブサイトを開設するケース
- ・ 著名な事業者の商標等と同一又は類似のドメイン名を使用し、当該ドメイン名を自己のウェブサイトへの転送を目的として利用しているケース
- ・ 著名な事業者の商標等と同一又は類似のドメイン名を取得し、事業者がウェブサイトを開設し事業を行うことの妨害を目的として、当該ドメイン名を保有し続けるケース
- ・ 著名な事業者の商標等と同一又は類似のドメイン名を登録し、当該ドメイン名の移転について不当な対価を要求するなど、ドメイン名の転売が目的と考えられるケース

## (2) 他人の特定商品等表示と同一又は類似のドメイン名

「特定商品等表示」とは、「人の業務に係る氏名、商号、商標、標章その他の商品又は役務を表示するもの」を指す。特定商品等表示に該当するためには、表示が自他識別機能、出所識別機能を備えていることが必要である。したがって、これらを有しない普通名称等をドメイン名に用いる場合には、特定商品等表示に該当しない。

また、類似性の判断については、基本的には同法第2条第1項第1号等の下で裁判例等が示してきた判断基準が妥当するものと考えられる。例えば、富山地裁平成12年12月6日判決は、「JACCS」と「jaccs」とを対比すると、アルファベットが大文字か小文字かの違いがあるほかは、同一である。そして、實際上、小文字のアルファベットで構成されているドメイン名がほとんどであることに照らせば、大文字か小文字かの違い

は重要ではないというべきである」と判示している（同判断は高裁でも維持され、その後、確定している（名古屋高裁金沢支部平成13年9月10日判決、最高裁平成14年2月8日第二小法廷上告不受理決定）。）。また、東京地裁平成13年4月24日判決は、「被告が本件ウェブサイト上に表示した本件表示は、「J-PHONE」、「ジェイフォン」、「J-フォン」を横書にしたものであって、本件ウェブサイト上の前記の「J-PHONE」と同一ないし類似するものである」と判示している（同判断は高裁でも維持されている（東京高裁平成13年10月25日判決）。）。

なお、これまで類似性が認められた裁判例及び日本知的財産仲裁センター（旧工業所有権仲裁センター）の紛争処理事例には次のようなものがある。

- ・「jaccs」とJACCS（名古屋高裁金沢支部平成13年9月10日判決）
- ・「j-phone」とJ-PHONE（東京高裁平成13年10月25日判決）
- ・「sunkist.co.jp」とSUNKIST、Sunkist（日本知的財産仲裁センター平成13年6月1日裁定）
- ・「sonybank.co.jp」とSONY（工業所有権仲裁センター平成13年3月16日裁定）
- ・「itoyokado.co.jp」とIto Yokado（工業所有権仲裁センター平成13年3月14日裁定）

(3) ドメイン名を使用する権利を取得し、若しくは保有し又はそのドメイン名を使用する行為

ドメイン名を使用する権利を取得する行為には、ドメイン名登録機関に対する登録申請によってドメイン名を使用する権利を自己のものとする場合のほか、登録機関からドメイン名の登録を認められた第三者から移転を受けることによってドメイン名を使用する権利を自己のものとする場合、登録機関からドメイン名の登録を認められた第三者からドメイン名の使用許諾を受ける場合も含まれる。

また、ドメイン名を使用する権利を保有する行為とは、ドメイン名を使用する権利を継続して有していることを指し、ドメイン名を使用する行為とは、ドメイン名をウェブサイト開設等の目的で用いる行為を指す。

### 3. 「不正競争」に該当する場合の効果

不正競争によって営業上の利益や信用を侵害された者は差止（不正競争防止法第 3 条）、損害賠償（同法第 4 条、第 5 条）、信用回復措置（同法第 7 条）を請求することができる。なお、自己の商標等と同一又は類似のドメイン名を不正に取得等され、営業上の利益を侵害された者は、仮にそのようなドメイン名を使用することについて許諾をしていたとすれば、通常受けるべき使用料に相当する額を損害額として請求できる（同法第 5 条第 2 項第 4 号）。

#### 4．ドメイン名紛争処理方針による取扱い

不正競争防止法においては、ドメイン名の移転を可能とする明文の規定はない。しかし、JP ドメイン名、一般ドメイン名のそれぞれについて JPNIC や ICANN（Internet Corporation for Assigned Names and Numbers）といった民間団体により紛争処理方針が策定されており、これらに基づいてそれぞれ以下のように紛争処理がなされている。

##### (1) JP ドメイン名についての取扱い

JP ドメイン名については、JPNIC の定める「属性型（組織種別型）・地域型 JP ドメイン名登録等に関する規則（第 40 条）」及び「汎用 JP ドメイン名登録等に関する規則（第 37 条）」（以下、両者をまとめて「登録規則」という。）において、登録者はその登録にかかる JP ドメイン名について第三者との間に紛争がある場合には、JPNIC の定める「JP ドメイン名紛争処理方針」（以下「JP-DRP」という。）に従った紛争処理機関による手続に同意することが規定されている。そして、JP-DRP によると、第三者である申立人に対する救済として、登録者のドメイン名登録の取消請求又は当該ドメイン名登録の申立人への移転請求が可能とされており（JP-DRP 第 4 条 i）、JPNIC が認定した紛争処理機関（現在のところ日本知的財産仲裁センターのみ）によって裁定があったときには、株式会社日本レジストリサービス（以下「JPRS」という。）は当該ドメイン名登録の移転又は取消の手続を行うこととされている（JP-DRP 第 3 条、第 4 条 k）。ただし、紛争処理機関の裁定結果に不服のある当事者は管轄裁判所（合意裁判管轄は、東京地方裁判所又は登録者の住所地における管轄裁判所とされている。）へ出訴することが可能であり、裁定通知後 10 日以内に出訴が行われた場合は、JPRS による取消や移転の裁定結果の実施が留保され、裁判所の判決に基づき、取消又は移転の手続が実施される（JP-DRP 第 4 条 k）。

なお、ドメイン名に係る権利内容は JPRS との契約で定められるものであるので、登

録規則に基づく JPRS の取消や移転の措置は不法行為には該当しないものと解される。裁判例においても「ドメイン名登録は、インターネット利用者とドメイン名登録機関である JPNIC（注：当時は JPNIC が登録業務を行っていた。）との間で登録規則をその内容（契約約款）とする私的な契約により付与されるものであり、ドメイン名登録者は JPNIC に対する債権契約上の権利としてドメイン名を使用するものであって、ドメイン名について登録者が有する権利は JPNIC に対する債権的な権利にすぎない」（東京地裁平成 13 年 11 月 29 日判決）とされている。

## (2) 一般ドメイン名についての取扱い

一般ドメイン名については、ICANN が採択した「統一ドメイン名紛争処理方針」（以下「UDRP」という。）をもとに、仲裁手続が認定紛争処理機関（世界知的所有権機関仲裁センター等）により実施されている。

したがって、一般ドメイン名については、ICANN の認定紛争処理機関に申立てを行うことにより、取消又は移転を求めることが可能である。ただし、UDRP に基づく裁定結果に不服のある当事者も、管轄裁判所（合意裁判管轄は、ICANN 認可レジストラの本社所在地又は登録者の住所地における管轄裁判所とされている。）へ出訴することが可能であり、裁定通知後 10 日以内に提訴された場合は取消や移転の裁定結果の実行が留保される（UDRP 第 4 節 k）。